

# 独立行政法人国立美術館の平成19年度に係る業務の実績に関する評価

## 全体評価

### ①評価結果の総括

- (イ) 芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とした美術振興の中心的拠点として、日本という国の文化基盤を形成する極めて重要な役割を十分に遂行し、業務運営の効率化、収支面でもほぼ良好な実績をあげたと認められる。
- (ロ) 国立新美術館は第2年度を迎え、職員の努力及び立地の適性等を活かした特筆に値する活動を展開したことは評価できるが、今後は、国立新美術館と既存の他の4館との役割及び機能分担などの多様な課題に対し、各館の特徴を活かして、具体的かつ積極的に取り組むことを期待する。

### <参考>

- I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置 A
- II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置 A
- III 財務、人事、施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置 A

### ②評価結果を通じて得られた法人の今後の課題

- (イ) 法人として5つの国立美術館が効率的な美術振興活動を行うためには、立地環境や得意分野のノウハウを有効に活かして、各館の機能分担および事業・研究協力の検討と改善の必要があると考える。(項目別P.4、7)
- (ロ) 国民の貴重な美術品を保存するナショナルセンターとしての役割を考慮すれば、各館の収蔵庫の狭隘化、老朽化に対応する必要がある。(項目別P. 18)
- (ハ) 優秀な学芸員等の人材を育成することは、日本の美術館および美術界全体にとって急務である。美術振興に関するナショナルセンターとして、公立私立の美術館等との連携を図りながら、意欲的に人材育成に取り組むことが重要である。(項目別P. 29)

### ③評価結果を踏まえ今後の法人が進むべき方向

- (イ) 国立新美術館の公募展の位置づけ、各館の作品収集の棲み分けなど、企画構想から作品収集、図書室、情報発信、人的交流に及ぶ業務について法人全体の有効な活動となるよう検討を重ねるとともに、国民に対するサービスをより具体化することが期待される。(項目別P.4、7)
- (ロ) 例えば、各館の収蔵庫の狭隘化・老朽化に対応する改築や地方に展覧機能をもつ収蔵施設の設置、民間の力を活用するなど、中期的な考え方にたった抜本的な対策を検討することが期待される。(項目別P. 18)
- (ハ) 法人としての人材育成プログラムの検討や美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修、人的ネットワーク作りなどの基本的なビジョンの再構築を期待する。(項目別P. 29)

### ④特記事項

今後、国民に提供するサービスをより充実させるためには、各項目に対する目標値の妥当性をあらためて検証し、得られた効果を明確にしていくことが望まれる。

# 文部科学省独立行政法人評価委員会 文化分科会国立美術館部会委員名簿

## ＜正委員＞

池田 弘一 アサヒビール株式会社代表取締役会長兼CEO

竹内 順一 財団法人永青文庫館長、茨城県陶芸美術館館長

## ＜臨時委員＞

安藤 紘平 映画監督、早稲田大学教授

島田 紀夫 ブリヂストン美術館館長

田中 通孝 武蔵野音楽大学音楽環境運営学科教授

前田 富士男 慶應義塾大学アート・センター所長

(以上6名)

# 独立行政法人国立美術館の平成19年度に係る業務の実績に関する評価

## 項目別評価総表

項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※				
	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度		18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
(大項目名)国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A				(小項目名)ナショナルセンターとしての人材育成	B	B			
(中項目名)美術振興の中核的拠点としての多彩な活動の展開	A	A				(小項目名)フィルムセンターの取組状況	A	A			
(小項目名)展覧会への取組(常設展)	A	A				(大項目名)業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A			
(小項目名)展覧会への取組(企画展)	A	A				(中項目名)業務の効率化の状況	A	A			
(小項目名)国立新美術館の取組	B	A				(大項目名)財務、人事、施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A			
(小項目名)情報の発信	A	A				(中項目名)財務の状況	A	A			
(小項目名)教育普及活動の実施状況	A	A				(中項目名)短期借入金の限度額	A	A			
(小項目名)調査研究の実施状況	B	B				(中項目名)重要な財産の処分等に関する計画	A	A			
(小項目名)観覧環境の提供	B	A				(中項目名)剰余金の使途	A	A			
(小項目名)国立新美術館の開館	B					(中項目名)人事の状況	A	A			
(中項目名)我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承	A	A				(中項目名)施設整備の状況	A	A			
(小項目名)収蔵品の収集	A	A				(中項目名)関連公益法人	A	A			
(小項目名)収蔵品の保管・管理	B	A									
(小項目名)収蔵品の修理	A	A									
(小項目名)収集・保管のための調査研究	A	A									
(中項目名)我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与	B	A									
(小項目名)ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力	B	A									

※当該中期目標期間の初年度から経年変化を記載。

備考(法人の業務・マネジメントに係る意見募集結果の評価への反映に対する説明等)

本法人の業務・マネジメントに係る意見募集を実施した結果、意見は寄せられなかった。

## 【参考資料1】予算、収支計画及び資金計画に対する実績の経年比較

(単位:百万円)

区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
収入							支出						
運営費交付金	4,276	4,622	5,158	4,984	6,779	6,042	運營業業費	4,591	5,060	5,669	6,011	7,274	13,417
展示事業収入	457	356	528	733	744	1,485	人件費	1,065	1,103	1,187	1,197	1,181	1,267
受託収入	0	4	6	38	42	18	管理部門※1	-	-	-	-	420	441
寄附金収入	10	199	15	6	29	11	事業部門※1	-	-	-	-	761	826
消費税等還付税額	52	0	0	0	0	0	業務経費	3,526	3,957	4,482	4,814	6,093	5,757
施設整備費補助金	0	0	0	0	0	6,393	一般管理費	941	994	1,200	979	816	1,960
							展覧事業費	1,941	2,239	2,583	2,981	2,183	2,906
							調査研究事業費	316	284	208	209	201	233
							教育普及事業費	322	386	398	410	489	658
							国立新美術館※2	6	54	93	235	2,404	0
							施設整備費補助金	0	0	0	0	0	6,393
計	4,795	5,181	5,707	5,761	7,594	13,949	計	4,591	5,060	5,669	6,011	7,274	13,417

※1 平成18年度より管理部門と事業部門を分けて記載

※2 国立新美術館設立等準備事業費(平成18年度は国立新美術館開館準備等事業費等)

(単位:百万円)

区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
費用							収益						
経常費用	3,501	3,652	3,960	4,105	5,885	6,093	運営費交付金収益	3,068	3,347	3,537	3,605	5,231	4,802
収集保管事業費	238	310	345	359	316	339	資産見返運営費交付金戻入	14	24	51	86	109	140
展覧事業費	1,098	1,054	1,129	1,131	1,468	1,901	資産見返物品受贈額戻入	117	68	50	38	21	14
調査研究事業費	340	249	236	313	444	382	入場料収入	426	297	461	646	601	921
教育普及事業費	424	450	496	525	714	788	その他事業収入	30	58	65	86	139	574
新館設置対応費	0	117	60	128	554	0	受託収入	0	4	6	38	42	18
受託事業費	0	4	6	36	41	18	寄附金収益	10	6	15	5	16	16
一般管理費	1,268	1,380	1,590	1,488	2,217	2,509	雑益	1	0	1	1	4	2
減価償却費	133	88	98	125	131	156	臨時利益	85	0	0	0	1	8
臨時損失	33	42	10	0	1	4							
計	3,534	3,694	3,970	4,105	5,886	6,097	計	3,751	3,804	4,186	4,505	6,164	6,495
							純利益	217	110	216	400	278	398
							目的積立金取崩額	0	0	0	43	0	0
							総利益	217	110	216	443	278	398

(単位:百万円)

区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
資金支出							資金収入						
業務活動による支出	4,533	4,543	5,300	5,174	7,315	7,213	業務活動による収入	5,979	5,179	5,692	5,761	7,557	7,628
投資活動による支出	86	242	332	237	430	6,355	運営費交付金収入	4,276	4,622	5,158	4,984	6,779	6,042
財務活動による支出	0	0	0	0	0	4	入場料収入	426	297	458	648	605	919
国庫納付金の支払額	0	0	0	0	1,499	0	その他事業収入	1,267	57	63	90	136	605
翌年度への繰越金	2,292	2,686	2,746	3,096	1,409	1,765	寄附金収入	10	199	13	6	27	12
							受託収入	0	4	0	33	10	50
							投資活動による収入	0	0	0	0	0	6,300
							前年度よりの繰越金	932	2,292	2,686	2,746	3,096	1,409
計	6,911	7,471	8,378	8,507	10,653	15,337	計	6,911	7,471	8,378	8,507	10,653	15,337

## 【参考資料2】貸借対照表の経年比較

(単位:百万円)

区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
資産							負債						
流動資産	2,298	2,693	2,770	3,124	1,487	1,910	流動負債	769	1,056	1,025	1,619	1,202	1,351
固定資産	71,700	72,504	85,449	86,292	121,326	127,036	固定負債	542	635	890	924	1,265	1,192
							負債合計	1,311	1,691	1,915	2,543	2,467	2,543
							資本						
							資本金	33,649	33,649	45,949	45,949	81,019	81,019
							資本剰余金	37,504	38,213	38,608	39,044	38,668	44,327
							利益剰余金	1,534	1,644	1,747	1,880	659	1,057
							(うち当期末処分利益)	(217)	(110)	(216)	(443)	(278)	(398)
							資本合計	72,687	73,506	86,304	86,873	120,346	126,403
資産合計	73,998	75,197	88,219	89,416	122,813	128,946	負債・資本合計	73,998	75,197	88,219	89,416	122,813	128,946

## 【参考資料3】利益(又は損失)の処分についての経年比較

(単位:百万円)

区分	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
I 当期末処分利益	217	110	216	443	278	398
当期総利益	217	110	216	443	278	398
II 利益処分量	217	110	216	443	278	398
積立金	63	39	122	443	278	4
独立行政法人通則法第44条第3項により主務大臣の承認を受けた額※	154	71	94	0	0	394
美術作品購入・修理積立金	92	69	94	0	0	394
設備積立金	62	2	0	0	0	0

備考:平成19年度の当期総利益(398百万円)は、入場料収入及び公募展事業収入の増加が主な要因である。なお、このうち394百万円について、独立行政法人通則法第44条第3項により主務大臣の承認を受けようとするものである。なお、承認を受けた場合の利用目的としては、中期計画に基づき、美術作品の購入・修理のために使用するものである。

【参考資料4】人員の増減の経年比較(過去5年分を記載)

(単位:人)

職種※	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
定年制研究系職員	53	58	60	60	61	61
定年制事務系職員	63	64	68	70	70	70

## 独立行政法人国立美術館の平成19年度に係る業務の実績に関する評価

段階的評価の区分及び定量的な評価を行う際の各段階別評価の達成度の目安については、次の考え方とする。

- S : 特に優れた実績を上げている。(客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評価を付す。)
- A : 中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。  
(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が100%以上)
- B : 中期計画通りに履行しているとは言えない面もあるが、工夫や努力によって、中期目標を達成し得ると判断される。  
(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70%以上100%未満)
- C : 中期計画の履行が遅れており、中期目標達成のためには業務の改善が必要である。(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70%未満)
- F : 評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。(客観的基準は事前に設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評価を付す。)

## I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

評定 A

中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。

### 中項目の評価

1. 美術振興の中核的拠点としての多彩な活動の展開

2. 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承

3. 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

評定

A

A

A

### 【中項目評価】

## 1. 美術振興の中核的拠点としての多彩な活動の展開

評定 A

中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。

### 評価のポイント

常設展及び企画展について、各館それぞれに特色のある充実した内容に取り組み、国立新美術館の公募展についてもスムーズに実施されたことは、美術振興の中核的拠点として成果があがったものと評価できる。

各館の立地環境や得意分野のノウハウを有効に活かした機能分担、事業・研究協力についての検討を重ね、積極的に改善を図ることで、国立美術館全体の効率的な美術振興活動をより一層推進することが望まれる。



中期計画の各項目	指標又は評価項目	評価基準					主な実績及び自己評価	評価	評価委員会によるコメント																														
		S	A	B	C	F																																	
<p>1. 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開  (1) 多様な鑑賞機会の提供  ①-1 利用者のニーズ、学術的動向を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。  ①-2 常設展は、国立美術館の各館の特色を十分に發揮したものとするとともに、最新の研究成果を基に、美術に関する理解の促進に寄与することを旨とする。  ①-3 企画展は、積年の研究成果に基づき、時宜を得たものを企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、利用者のニーズに対応しつつ、特ご次の観点に留意して実施する。  (イ) 国際的動向に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。  (ロ) 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。  (ハ) メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。  (ニ) 過去の埋もれてい던作家・作品・動向の発見や再評価に努める。  なお、企画展の開催回数は概ね以下のとおりとする。  (東京国立近代美術館)  本館 年3回～5回程度  工芸館 年2回～3回程度  フィルムセンター  年5番組～6番組程度  (京都国立近代美術館)  年6回～7回程度  (国立西洋美術館)  年3回程度  (国立国際美術館)  年5回～6回程度  (国立新美術館)  年6回～7回程度(公开展を除く。)  ①-4 各館で展覧会を開催するにあたっては、実施目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努める。  ①-5 各館の連携による共同企画展の実現について検討し推進する。  ② 地方における鑑賞機会の充実、所蔵作品の効果的活用を図る観点から、地方のニーズを反映させた地方巡回展を積極的に行う。  また、公立文化施設等と連携協力して、所蔵映画フィルムによる優秀映画鑑賞会を実施する。  ③ 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広範な活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて、入館者数の目標を設定し、その達成に努める。  ④ 映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した上映、展示等の活動に重点的に取り組む。</p>	<p>展覧会への取組(常設展)  【定性的に評価】</p>	<p>I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上  1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開  (1) 多様な鑑賞機会の提供  ① 所蔵作品展</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>開催日数</th> <th>展示替回数</th> <th>入館者数</th> <th>目標数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館(本館)</td> <td>291</td> <td>5</td> <td>176,675</td> <td>194,000</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館(工芸館)</td> <td>127</td> <td>2</td> <td>27,637</td> <td>43,000</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>226</td> <td>8</td> <td>67,307</td> <td>94,000</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>254</td> <td>1</td> <td>297,437</td> <td>141,000</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>218</td> <td>4</td> <td>245,986</td> <td>235,000</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>1,116</td> <td>20</td> <td>815,042</td> <td>707,000</td> </tr> </tbody> </table> <p>各館の特徴  ア 東京国立近代美術館(本館)  所蔵作品展「近代日本の美術」では、絵画・彫刻・水彩・素描・版画・写真等、約9,500点のコレクションから、毎回180～250点の作品を選び、20世紀初頭から現代に至る日本の近代美術の流れが概観できるように展示している。各階ごとの時代区分などの大枠は一定に保ちながら、会期ごとの展示作品の入れ替えを行っている。  また4階の特集コーナー、3階版画コーナー、写真コーナー、2階ギャラリー4では、特定の作家に絞った展示や特定のテーマによる小企画を設けることにより、編年順の所蔵作品展とは異なった視点を導入し、新鮮さと各会期ごとの変化を印象づけるよう努めている。  平成19年度は、所蔵作品展音声ガイドを導入した。利用者からは非常に高い評価を得ており、『ギャラリーガイド』、『鑑賞ノススメ』といった既存の観賞ツールと合わせて、来館者に対しての開口を広げることができた。  所蔵作品展は、会期ごとに内容が変化することを積極的にアピールし、リピーターの増加を図った。とりわけ、力を入れた小企画展は、新聞、雑誌、インターネット等で数多く採り上げられ、反響を呼んだ。  所蔵作品展の内容をさらに充実させるために、小企画展等において国立美術館他館の所蔵作品をあわせて展示した。それにより企画の意図が明確化された。  作品の前で作家本人が語るアーティスト・トークを5回実施し、その模様をDVD化し会期中会場で上映したほか、ライブラリでの閲覧も開始した。  (工芸館)  陶磁、ガラス、染織、漆工、木竹工、金工・ジュエリー、人形、グラフィック・デザイン等の各分野にわたる約2,600点の所蔵作品の中から、約90～100点の作品を選び、「I友禅と型染/II元祖インダストリアル・デザイナー クリストファー・ドレッサー」、「Iこども工芸館/II現代のガラス」等の工芸の歴史や特定のテーマに沿った展示を実施した。  プレスリリースを早期に作成発送し、ポスター・チラシを適宜配布、交通広告や新聞広告等で効率的な広報を図るとともに、鑑賞理解の補助のための和英の出品リストや鑑賞カードの配布、要望が多く寄せられていたキャプションの改善等、来館者サービスの充実に努めた。</p> <p>イ 京都国立近代美術館  日本画、洋画、版画、彫刻及び陶芸、染織、金工、木竹工、漆工、ジュエリー等の工芸、写真等約8,600点の中から、展示替え(年8回)を行い、近代日本美術の代表作や記念的な作品を中心に欧米の近・現代作品も併せて展示するとともに、企画展に合わせた小企画も同時に開催した。  平成19年度は企画展と連動したテーマ展示に力を注いだ。「福田平八郎と同時代の京都・洋画」「新制作協会の作家たちと1960年代の京都」、「ヨーロッパ・アメリカの工芸」は、開催された展覧会の背景説明、展覧会では紹介しきれなかった部分を効果的に補う展示として好評を得た。  また、コレクション・ギャラリーと教育支援活動を連携させた「ギャラリー・ラボ2007」の開催は、今後の美術館運営に多くの示唆を与えるものであった。</p> <p>ウ 国立西洋美術館  松方コレクション(印象派の絵画及びロダンの彫刻を中心とするフランス美術コレクション)及び中世末期から20世紀初頭までの西洋美術に関する作品の中から、絵画、素描、版画、彫刻等約200点の作品を選び、西洋美術の流れが概観できる展示を行った。なお、平成19年9月14日以降は、新館空調改修工事準備のため、新館展示室を閉鎖して所蔵作品展の規模を縮小し、本館及び前庭における展示のみとした。  また、より広い層に美術館の存在をアピールし、美術館のコレクションへの関心をより一層深めることを目的として、民間企業の支援による「OPEN MUSEUM」事業を平成19年度から開始し所蔵作品展に関連したものについては以下のような事業を実施した(詳細は「(4)国民の美的感性の育成」及び「(6)快適</p>	館名	開催日数	展示替回数	入館者数	目標数	東京国立近代美術館(本館)	291	5	176,675	194,000	東京国立近代美術館(工芸館)	127	2	27,637	43,000	京都国立近代美術館	226	8	67,307	94,000	国立西洋美術館	254	1	297,437	141,000	国立国際美術館	218	4	245,986	235,000	計	1,116	20	815,042	707,000	<p>A</p>	<p>常設展の充実化は平成18年度より顕著であり、その努力が「目に見える形」で実を結んだものと認められ、「上質で、魅力溢れる常設展」として、小テーマ展や広報など、取り組んだ各館の努力は評価できる。とはいえ、国立美術館全体としては、より一層の改善の取り組みを期待したい。  【各館個別事項】  ・国立西洋美術館の「Open Museum」事業は、新しい試みとして評価できる。  ・京都国立近代美術館の企画展に連動させた所蔵品展に工夫をこらしており、高く評価される。  ・国立国際美術館の所蔵品展は、「コレクション1～4」のシリーズ化が、現代美術の見せ方の新しい局面を開いたものとして評価できる。  ・東京国立近代美術館や京都国立近代美術館において、目標入館者数に達しなかったとはいえ、内容の充実がそれを補っている。  【より良い事業とするための意見】  ・常設というイメージを変えるような展示替えを行うことも一つの工夫ではあるが、国立西洋美術館のように、しっかりしたコンセプトを有した常設展を展示替えなしで行うことも、美術館の存在をアピールする良い方法であると考えられる。  ・常設展を実施しない国立新美術館だが、法人内の協力により、国立新美術館を会場として、法人として的小テーマ常設展を実現するなど、常設展会場としての雰囲気を感じることができるようになっていくことが急務であると考えられる。  ・我が国の作家や芸術家の動向を海外に紹介する目標の達成具合や展示目的・入館者目標の設定根拠を明確にすることを望む。</p>
館名	開催日数	展示替回数	入館者数	目標数																																			
東京国立近代美術館(本館)	291	5	176,675	194,000																																			
東京国立近代美術館(工芸館)	127	2	27,637	43,000																																			
京都国立近代美術館	226	8	67,307	94,000																																			
国立西洋美術館	254	1	297,437	141,000																																			
国立国際美術館	218	4	245,986	235,000																																			
計	1,116	20	815,042	707,000																																			

な観覧環境の提供」を参照)。  
 ・「FUN DAY」, 「Fun with Collection 2007 見る楽しみ・知る喜び 美術史・市場・修復編」,  
 「Museum X' mas in 国立西洋美術館」等の教育普及事業を実施  
 ・プロジェクトによるガイド映像と大型パネル展示のスペースを本館1階ロビーに新設。平成18年度の  
 「ウェル・come美術館」事業で制作した映像を再編集し、松方コレクション、ル・コルビュジェの建築及  
 び主要な所蔵作品に関する映像の計10本を放映  
 ・建築、壁画等移動が不可能な美術作品を写真によって紹介する「折りの中世—ロマネスク美術写真展」を実施  
 以上の「OPEN Museum」事業は、民間企業と美術館の新しい提携の形として複数のメディアで報道  
 され、広報面でも効果があった。

エ 国立国際美術館  
 美術作品の展示を通じ、日本美術の成立と発展が、世界の美術と密接な関係を有することを系統的・具体的  
 に明らかにするとともに、我が国と世界の現代美術の新しい動向を分かりやすく展示している。  
 平成19年度の所蔵作品展は、杉本博司展と関連を見出せる作品を数多く選定し杉本博司の写真と当館の現  
 代美術のコレクションを相互に鑑賞できるような展示構成とした「コレクション1」、同時期開催の企画展  
 「藤本由紀夫+/-」展の作品にちなんで抽象的な作品を含めて構成したほか、未公開のコレクションを中心と  
 して「芸術と言葉」、「街角」等様々なテーマについての展示、在日韓国人作家の作品の紹介等を行った「コ  
 レクション2」、1960年代以降から今日までの美術作品を、3つのゆるやかな文脈に沿って紹介した「コ  
 レクション3」、30点以上の初公開作品を含む125点を、絵画・彫刻・写真を中心に展示した「コレクシ  
 ョン4」を開催した。また、企画展「エミリー・ウングワレー」展の会期中、同展と関連した「ユートピア  
 ルーム」を併設した。

展覧会への取組(企画展)  
 【定性的に評価】

- ② 企画展  
 企画展は、利用者のニーズにこたえ、以下の観点に留意して実施した。  
 イ 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとと  
 に、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。  
 ロ 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。  
 ハ メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り  
 上げ、最先端の現代美術への関心を促す。  
 ニ 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。  
 ホ その他

館名	展覧会名	開催日数	入館者数	目標数	企画趣旨
東京国立近代美術館(本館)	① 生誕100年 豊光展	51	32,309	32,000	ロ
	② アンリ・カルティエ=ブレッソン 知られざる全貌	48	59,432	32,000	イ
	③ アンリ・ミショー ひとのかたち	48	28,201	26,000	イ・ロ
	④ 平山郁夫 折りの旅路	44	110,596	200,000	ロ
	⑤ 日本彫刻の近代	37	15,981	10,000	ロ
	⑥ わたしいまめまいしたわ 現代美術にみる自己と他者	45	20,109	11,000	ロ
	⑦ 生誕100年 東山魁夷展	3	11,572	19,000	ロ
	計	276	278,200	330,000	
東京国立近代美術館(工芸館)	① 青磁を極める—岡部嶺男展	45	11,055	11,000	ニ
	② 開館30周年記念展Ⅰ 工芸館30年のあゆみ	51	14,429	10,000	ホ
	③ 開館30周年記念展Ⅱ 工芸館30年の展望	54	13,338	10,000	ホ
	計	150	38,822	31,000	
京都国立近代美術館	① アル・デコ・ジュエリーの世界 輝きの詩人シャル・ジャコ、ブジョロ、リクらの宝飾デザイン展	13	17,262	9,000	イ・ニ
	② ノイズレス:鈴木昭男+ロルフ・ユリウス展	12	2,922	1,000	ハ
	③ 福田平八郎展	37	34,332	18,000	ホ
	④ 舞台芸術の世界 デイヴィッドのロシア人と舞台デザイン	33	15,022	27,000	イ
	⑤ シビル・ハイネン:テキスタイル・アートの彼方へ	25	9,854	11,000	ロ、ホ

A  
 各館ともに、国際性・テーマ性・館独自の作家評価など、それぞれ特色のある充実した内容となっており、「競演」ともいえる活況を呈している。従来等閑視していた、あるいは、あまり注目されなかった作者や流派、コンセプトを敢えて取り上げ、「入館者の大量動員」を望めないことを承知の上で実施したこと及びフィルムセンターの上映企画や巡回展の実施は、「国立美術館」としての責任を果たしていると認められ高く評価したい。  
 一方で、館によっては中期計画に掲げた「埋もれた作家・作品・動向の発見や再評価」に関する展覧会は少なくなっており、今後さらなる取り組みを期待したい。

【各館個別事項】  
 フィルムセンターの時代性、京都国立近代美術館の地域性を契機とする着実な企画が目ざされた。東京国立近代美術館の「日本彫刻の近代」、国立西洋美術館の「ムンク」、国立新美術館の「モネ」は学術的内容の次元で高く評価する。

【より良い事業とするための意見】  
 国立新美術館の企画展と、4館個々の企画展との整合性や特性について、検討する時期を迎えており、よりよい事業活動につなげるためには、企画展の企画のみならず、各館の学芸員との協働や人材活用などの再検討が必要であると考える。

	⑥心の風景を求めて 没後10年 麻田 浩展	43	17,358	14,000	ニ
	⑦文 承根+八木 正 1973-83の 仕事展	37	11,349	6,000	ニ
	⑧カルロ・ザウリ展 イタリ ア現代陶芸の巨匠	36	9,937	12,000	イ, ニ
	⑨新作作品展—寄贈されたM&Yコ レクション 池田満寿夫の版画	31	9,432	10,000	ホ
	⑩玉村方久斗展	36	12,775	8,000	ニ
	⑪ドイツ・ポスター 1890～ 1933	30	17,723	13,000	ロ, ニ
	計	333	157,966	129,000	
国立西洋美術 館	①イタリア・ルネサンスの 版画 — チューリヒ工科大 学版画素描館の所蔵作品に よる	32	21,551	21,000	イ
	②バルマ — イタリア美術, もう 一つの都	79	167,934	150,000	イ
	③ムンク展	76	263,907	210,000	イ, ロ
	④ウルビーノのヴィーナス — 古 代からルネサンス, 美の女神の系 譜	24	80,009	60,000	イ
	計	211	533,401	441,000	
国立国際美術 館	①ベルギー王立美術館展	69	108,998	124,000	イ
	②様々な祖型 杉本博司新収蔵 作品展	69	113,199	124,000	ホ
	③世界遺産クレムリンの奇 跡 ロシア皇帝の至宝展	61	81,769	88,000	イ
	④藤本由紀夫展 +/-	63	89,367	88,000	ハ
	⑤現代美術の皮膚	54	22,253	11,000	ロ
	⑥国立国際美術館開館三十 周年記念展 30年分のコ レクション	42	67,031	10,000	ロ
	⑦エミリー・ウングワレー 展 アボリジニが生んだ天 才画家	30	15,779	10,000	イ
	計	388	498,396	455,000	
国立新美術館	①ポンピドー・センター所 蔵作品展 異邦人たちのバ リ1900-2005	33	124,933	100,000	イ, ロ, ハ
	②大回顧展モネ —印象派の巨匠 、その遺産	76	704,420	250,000	イ
	③スキン+ボーンズー19 80年代以降の建築とファ ッション	60	60,056	30,000	ハ
	④日展100年	36	135,486	100,000	ホ
	⑤安齋重男の“私・写・録”1970 -2006	42	15,895	21,000	ロ
	⑥アムステルダム国立美術 館所蔵 フェルメール《牛 乳を注ぐ女》とオランダ風 俗画展	72	493,886	200,000	イ
	⑦文化庁芸術家在外研修制 度40周年記念〈文化庁芸 術家在外研修の成果〉『旅』 展—異文化との出会い、そして対 話—	27	18,772	15,000	ホ
	⑧没後50年 横山大観—新たなる 伝説へ	36	223,671	150,000	ニ
	⑨平成19年度(第11回)文 化庁メディア芸術祭	11	40,553	20,000	ハ

	⑩アーティスト・ファイル 2008—現代の作家たち	24	13,005	12,000	ホ
	⑪モディリアーニ展	6	16,736	18,000	イ
	計	423	1,847,413	916,000	
合計		1,781	3,354,198	2,302,000	

### ③ 巡回展

企画館	展覧会名	開催館	開催日数	入館者数
東京国立近代美術館 (工芸館)	東京国立近代美術館所蔵 現代工 芸の名品	石川県輪島漆芸美術 館	39	2,724
	東京国立近代美術館 工芸 名品展	射水市新湊博物館	50	2,659
東京国立近代美術 館(フィルムセンター)	平成19年度優秀映画鑑賞推 進事業	全国189会場	352 (延べ日数)	93,525
京都国立近代美術館	呉市立美術館開館25周年記念 京 都日本画の粋 京都国立近代美術 館の名品	呉市立美術館	37	8,300
	京都国立近代美術館所蔵 「洋画 の名画」	松坂屋美術館	26	33,161
	岩手銀行創立75周年記念事業 盛岡市民文化ホール開館10周年 記念事業 京都国立近代美術館所蔵 日本の 洋画展 浅井忠、梅原龍三郎、安 井曾太郎ら54作家の競演	盛岡市民文化ホール ・展示ホール	28	8,099
国立西洋美術館	国立美術館巡回展 国立西洋美術館 所蔵 ヨーロッパ美術の精華 — 神々 と自然のかたち —	姫路市立美術館	25	7,577
	国立美術館巡回展 国立西洋美術館 所蔵 ヨーロッパ美術の精華 — 神々 と自然のかたち —	松本市美術館	45	11,272
計				167,317

### ④ 東京国立近代美術館フィルムセンター映画上映等

【上映会】

タイトル	会場	上映回数	日数	入館者数	目標数	共催者
①追悼特集 映画監督 今村昌 平と黒木和雄	大ホール	84	42	14,784	11,500	
②映画監督 川島雄三	大ホール	108	36	24,609	16,500	
③特集・逝ける映画人を偲んで 2004-2006	大ホール	104	53	19,043	16,500	
④日本・ウズベキスタン国交樹 立15周年記念 ウズベキスタ ン映画祭	大ホール	20	10	2,095	2,000	ウズベキスタン 文化・芸術フォ ーラム基金
⑤日印交流年 インド映画の輝 き	大ホール	68	34	8,528	7,000	
⑥第8回東京フィルメックス 山 本薩夫監督特集 ～ザッツく社会 派>エンタテインメント～	大ホール	24	8	3,543	3,000	特定非営利活動 法人東京フィル メックス実行委 員会
⑦NFC所蔵外国映画選集 ヨ ーロッパ映画名作選	大ホール	42	21	6,023	5,500	
⑧生誕百年 映画監督 マキノ 雅広(1)、(2)	大ホール	222	74	34,973	24,000	
⑨EUフィルムデーズ2007	大ホール ・ 小ホール	40	16	4,101	3,000	駐日欧州委員会 代表部EU加盟 国大使館・文化 機関
⑩映画の教室2007	小ホール	18	9	2,064	2,500	
⑪アンコール特集 2006年度上 映作品より	小ホール	18	9	2,277	2,000	

⑫日本・ポーランド国交回復50周年記念 ポーランド短篇映画選 ウッチ映画大学の軌跡	小ホール	24	12	2,190	3,000	ポーランド映画選実行委員会
⑬スウェーデン・ドキュメンタリー新作選	小ホール	12	8	981	1,500	スウェーデン文化交流協会、スウェーデン映画協会
⑭日本の文化・記録映画選：芸術を記録する	小ホール	18	9	909	1,500	
⑮NFC所蔵外国映画選集 アメリカ映画史研究①	小ホール	18	9	1,422	2,000	
計		820		127,542	101,500	

【展覧会】

展覧会名	日数	入館者数	目標数	共催者
ステル写真でみる日本の映画女優	153	8,060	6,000	
没後30年記念 チャップリンの日本 チャップリン秘書・高野虎市遺品展	45	3,562	2,000	
マキノ映画の軌跡	72	3,092	3,000	立命館大学アート・リサーチセンター
計	270	14,714	11,000	

施設名	※1			※2		
(東京国立近代美術館) 本館	3回以上	—	3回未満	実績：7回 (前年度実績：7回)		A
工芸館	2回以上	—	2回未満	実績：3回 (前年度実績：5回)		A
フィルムセンター	5番組以上	4番組	4番組未満	実績：15番組 (前年度実績：14番組)		A
(京都国立近代美術館)	6回以上	5回	5回未満	実績：11回 (前年度実績：8回)		A
(国立西洋美術館)	3回以上	—	3回未満	実績：4回 (前年度実績：3回)		A
(国立国際美術館)	5回以上	4回	4回未満	実績：7回 (前年度実績：8回)		A
(国立新美術館)	6回以上	5回	5回未満	実績：11回 (前年度実績：4回)		A

(2) 美術創造活動の活性化の推進  
国立新美術館は、全国的な活動を行っている美術団体に展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することなどを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開やアーティストの育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化に資する。  
また、メディアアート、アニメ、建築など世界から注目される新しい芸術表現の国内に向けて拠点的な役割を果たすことを目指し、その取組みを積極的に進める。

国立新美術館の取組  
【定性的に評価】

(2) 美術創造活動の活性化の推進  
① 公募団体等への展覧会会場の提供（国立新美術館）  
公募展団体数：69 団体  
年間利用室数：延べ7,000 室/年  
稼働率：100%  
入館者数：1,317,508 人  
  
平成19年度から開始した公募団体等への展覧会会場の提供について、公募団体等からの要望、意見を聞きつつ、以下のような多岐にわたる支援を行った。  
・作品搬入及び搬出のための車両出入等及び駐車等の基準を作成し、車両の出入りによる近隣への影響に配慮し、かつ作品搬入出が円滑に行えるように体制を整えた。  
・審査・陳列作業等が円滑に行われるよう作品搬送用台車等の備品の充実を図った。  
・作品陳列及び撤去作業が円滑に行えるように、事前に公募団体等と調整を図り、作品用エレベーターの時間別割り振りや陳列及び撤去作業時間の管理体制を整えた。  
・展示室内の可動壁面を活用し、事前に公募団体等と調整し、公募展ごとに多様な会場構成を可能とした。  
・展示環境の向上のために、現場において団体等と連携して照明調光作業ができる体制を整えた。  
・展示壁面等施設の保全を図るため、展示室及び野外展示場等の保全対策を整えた。  
・団体等に対し、「展示室等利用の手引き」、「絵画及び書等平面作品の陳列に関するガイドライン」、「公募展備品カタログ」等展覧会開催のための資料を作成・配布し、陳列作業の安全性や技術の向上に努めた。  
・公募展サポートセンターを立ち上げ、団体等の作品搬入から陳列、撤去作業及び備品貸出並びに施設の管

A  
立地条件にも恵まれ、中核的拠点の機能をよく果たしている。このことは、企画展および美術図書室の入館者数にその努力がよく示されている。また、国の施設として初めての公募展がスムーズに行われたことも評価したい。さらに、公募展の実施にあたっては、各美術団体からの様々な要望に対し柔軟に対応し、「備品カタログ」作成や「公募展サポートセンター」を立ち上げたことについても、高く評価できる。

【より良い事業とするための意見】  
・国立新美術館での取り組みの努力を、法人の有効な活動として活かすためにも、国立新美術館の位置づけについて検討を重ね、他の4館との違いを明らかにしていくことが望まれる。

・中核的拠点として美術関係の専門書店の設置や多様な芸術の展覧の場として、新世代に身近なメディアを取り込んで展示する等の取り組みが望まれる。

等を一元的に管理ができる体制を整えることにより、公募展の円滑な運営をサポートした。公募展サポートセンターでは、使用団体に関する問い合わせ及び電話取次等も行き、公募展が円滑に運営できる体制を整えた。

- ・公募展の観覧者に対し、定期的に公募展開催案内チラシの作成・配布及び当館ホームページでの案内等公募展の周知、広報等に努めた。

② 新しい芸術表現への取組

【東京国立近代美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
わたしいまめまいしたわ (企画展)	45	ビデオ、写真、絵 画、彫刻、版画ほか	20,109	11,000	
リアルのためのフィクション (小企画展)	69	ビデオ、写真、絵画 ほか	—	—	
計	114		20,109	11,000	

ジュリアン・オビーの映像インスタレーション作品「日本八景」を購入し、2階エントランスホールに設置。

【東京国立近代美術館フィルムセンター】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
アニメの源へー日本アニメーション映画(1924~1952) (共催事業)	11	アニメーション	—	—	シネマテーク・ケベコ ワーズ(カナダ・モン トリオール)
アニメ——日本アニメーション映画史(貸与)	4	アニメーション	—	—	フィンランド・フィルム・アーカイブ
計	15		—	—	

【京都国立近代美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
ノイズレス：鈴木昭男+ロルフ・ユリウス展(企画展)	12	サウンド・インスタレーション	2,922	1,000	共催：京都新聞社、京都ドイツ文化センター 協賛：ルフトハンザドイツ航空 企画協力：京都国際現代音楽フォーラム
計	12		2,922	1,000	

【国立西洋美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
ル・コルビュジエ資料展(平成21年度)実施に向けた準備	—	建築	—	—	—
計	—		—	—	—

建築専門の客員研究員の招へい。教育普及担当職員による海外調査。

【国立国際美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
藤本由紀夫展+/- (企画展)	63	メディアアート	89,376	88,000	—
計	63		89,376	88,000	

メディアアート専門の客員研究員の招へい。16ミリフィルム上映(1回)、ビデオ上映(7回)を実施。

【国立新美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
異邦人たちのパリ1900-2005 (企画展)	33	ビデオ・アート	124,933	100,000	ボンビドー・センター(フランス)
スキン+ボーンズ 1980年代以降の建築とファッション (企画展)	60	建築、ファッション	60,056	30,000	ロサンゼルス現代美術館(アメリカ) サマーセットハウス(イギリス)
平成19年度(第11回)文化庁メディア芸術祭(企画展)	11	アニメーション、マンガ、エンターテインメント	40,553	20,000	文化庁メディア芸術祭実行委員会(文化庁、CG-ARTS協会)
アーティスト・ファイル2008	24	ビデオ・アート、イ	13,005	12,000	—

ー現代の作家たち（企画展）		ンスタレーション			
計	128		238,547	162,000	

館内（B1）液晶ディスプレイを活用し、文化庁メディア芸術祭関連映像作品を放映。

- (3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上  
国立美術館について、所蔵作品、展覧会活動、その他の活動状況を積極的に広く社会へ紹介し、国立美術館についての理解を得るよう努めるとともに、国内外の美術に関する情報の収集・提供・利用の促進に努める。
- ① ICT（情報通信技術）を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等の積極的な情報発信やホームページの充実を図り、ホームページのアクセス件数の年間の平均が、前中期目標期間の年間平均を上回る実績となるよう努める。
- ②-1 美術史その他の関連書誌に関する基礎資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、展覧会活動の推進に役立てるとともに、図書室等において芸術文化の情報サービスを広く提供するよう努め、その利用者数が前中期目標期間の年間平均を上回るよう努める。
- ②-2 所蔵作品データ、所蔵資料データのデジタル化を一層推進し、ネットワークを通じてより良質な多様なコンテンツの提供を進めるとともに、本5年間の中期目標期間中のインターネット上での公開件数の実績が、前中期目標期間の実績を上回るよう努める。
- ②-3 国立美術館全体の機能として、ネットワーク共有を前提とするIDC（インフォメーションデータセンター）を確立し、美術館における情報技術の活用策を積極的に開発しながら、その知見を広く共有化することに努める。

情報の発信  
【定性的に評価】

(3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上  
① 情報通信技術（ICT）を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等

ア ホームページアクセス件数

館名	アクセス件数	目標数 (第1期平均)
本部	5,577,510	74,434
東京国立近代美術館	7,763,919	4,341,163
京都国立近代美術館	2,127,372	222,502
国立西洋美術館	5,924,487	720,126
国立国際美術館	597,608	360,196
国立新美術館	12,076,861	—
計	34,067,757	5,724,279

- イ 各館のICT活用の特徴
- (ア) 本部  
法人ホームページをリニューアルし、国立美術館5館の展覧会や各種催事等のトピックスを一覧できるようにするなど充実を図ったことにより、アクセス数が大きく増加した。
- (イ) 東京国立近代美術館  
ホームページ・デザインを改良するとともに、コンテンツ・マネジメント・システム（CMS）を稼働させ、コンテンツの追加更新を迅速に行える体制を整えた。  
また、本館アートライブラリが所蔵する国内展覧会図録の書誌・所在情報の国立情報学研究所目録所在情報サービス（NACSIS-CAT）への登録について、同研究所の選及入力支援事業により4,050件を登録した。  
フィルムセンターでは、事業関連の情報を提供する「NFCメールマガジン」について登録者数の着実な増加があった。また、映画関連資料へのアクセス希望に対しては、デジタル・データによる提供を積極的にいっしややかな図版提供に努めた。
- (ウ) 京都国立近代美術館  
麻田浩展電子メール討論会を実施し、寄せられた意見をもとに、展覧会最終日にシンポジウムを開催した。また、コレクション・ギャラリーの各小企画、テーマ展示に関する小論文を毎回ホームページに掲載し、情報発信の充実にも努めた。
- (エ) 国立西洋美術館  
ホームページの構成・デザインを一新し、開催中の展覧会、今後の展覧会等の最新情報とともに、過去の展覧会や当館についてなど、国立西洋美術館についての理解を深めるコンテンツを提供する内容とした。  
「今日、どの作品が観られるか」という展示情報を含む所蔵作品検索システムを構築し、インターネットへの公開を開始した。また、科学研究費補助金により、作品の来歴・掲載文献歴といった学術情報や、画像のデジタル化を行った（データ延べ数：テキストデータ4,300件、画像データ2,100件）。インターネットに公開した所蔵作品検索システムは、収蔵作品の管理と情報公開の2つの業務の一元化により実現したもので、ホームページ上の煩雑な作品情報更新を省力化することにもつながった。
- (オ) 国立国際美術館  
展覧会等の情報を利用者に分かりやすく提供するとともに、特にバリアフリー情報、託児サービス等利用案内情報の充実にも努めた。  
また、展覧会ごとに英語版の展覧会情報ページを作成し、海外への情報発信を図った。
- (カ) 国立新美術館  
インターネットで他の美術館や公募団体展、画廊での展覧会情報を検索できるサービス「アートコモンズ」の充実にも努めた。  
ホームページによる企画展・公募展の開催情報の告知、講演会・アーティストトーク・ワークショップの告知、講演会記録（音声）の公開、「美術館ニュース」のダウンロード等、インターネットを広報媒体として積極的に利用した。  
また、特別閲覧室の利用オンライン予約の提供の開始、ワークショップなどの申込の電子メールによる受付等の取組を実施した。

② 美術情報の収集、記録の作成・蓄積、デジタル化、レファレンス機能の充実

ア 図書資料等の収集

館名	収集件数	累計件数	利用者数	目標数
東京国立近代美術館 (本館)	3,571	102,516	2,961	1,853

A  
美術情報の発信、レファレンス、デジタル化では、近・現代美術分野では最先端であり、ナショナルセンターとしての機能を十分発揮しているものと考えられる。とくに「美術図書館連絡会」など横断的な検索システム構築の貢献や「著作権者の許諾を得ての公開」という困難な課題に取り組んでいることは、高く評価する。

【より良い事業とするための意見】  
・ホームページ等情報を発信する際には、国民の方々が親しみやすく魅力的な内容とすることが重要である。

・国立美術館全体の所蔵する資料のレファレンス機能の確立は急務であり、国立美術館全体の所蔵作品とその基礎資料・図書類の整備及びデジタル化の充実が望まれる。

・情報発信は現代社会では必須の要で、それに対応する拡充は不可欠だが、他方で、その費用対効果がやや等閑にされる傾向があるため、コスト面をきちんと監査する体制を法人内で整備されることを期待する。

東京国立近代美術館 (工芸館)	1,903	15,907	453	317
東京国立近代美術館 (フィルムセンター)	1,276	27,506	3,181	3,085
京都国立近代美術館	2,068	15,753	—	—
国立西洋美術館	2,528	41,341	365	119
国立国際美術館	1,017	31,809	—	—
国立新美術館	13,286	120,069	116,740	—
計	25,649	354,901	123,700	5,374

注1 京都国立近代美術館は4階、国立西洋美術館は1階、国立国際美術館は地下1階に図録等が閲覧できる情報コーナーを設け、入館者が自由に閲覧できるようにしており、その場所については、利用者数の把握はしていない。

注2 国立新美術館は、目標数を設定していない。

イ 特記事項

美術図書館連絡会（ALC）の美術図書館横断検索の検索対象に国立情報学研究所の「Webcat」並びに東京国立博物館及び江戸東京博物館の図書資料が加わり、検索範囲が拡大した。なお、東京国立近代美術館、国立西洋美術館及び国立新美術館が参加している美術図書館連絡会は、美術図書館横断検索の開発と公開が評価され、アート・ドキュメンテーション学会より第1回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞を受賞した。

(ア) 東京国立近代美術館

本館では、平成18年開催の藤田嗣治展を契機として、同画家の旧蔵資料836点を受け入れた。フィルムセンターは、フィルムセンターの原本提供と監修により「国際映画新聞」の復刻を行った（ゆまに書房刊）。「国際映画新聞」全284冊のうち19年度内には第6回配本、第7回配本として、213号から282号まで（235号を除く）69冊の原本提供を行った。

(イ) 国立西洋美術館

我が国における西洋美術史研究のナショナルセンターの機能を担うための方策として、研究資料センター利用規定の見直しや、一過性資料（パンフレット、リーフレット、新聞・雑誌クリッピング資料、絵はがき等の資料類）の収集・公開方法の検討を行った。

現在、外部で企画進行中のレファレンス・ブック（『展覧会カタログ総覧（仮）』民間企業の企画・発行）の美術振興における重要性にかんがみ、東京国立近代美術館等と共同で同書に対するデータ協力及び監修を行った。

(ウ) 国立国際美術館

国内外の現代美術に関連する図書資料等を中心に収集を行った。特に国際展に関する文献等も積極的に収集した。

(エ) 国立新美術館

特別資料閲覧コーナーを開設し、一般の供覧に適さないような貴重書などについて、別館において事前予約制の閲覧サービスを開始した。

また、「JAC (Japan Art Catalog) プロジェクト」として、海外では入手が困難な日本の展覧会図録を取りまとめ、欧米の日本美術研究の拠点（4機関）に寄贈し、日本の美術館による研究成果を発信した（19年度送付実績1,955冊）。

さらに、平成19年度から「JAC II プロジェクト」として、展覧会図録を寄贈した機関から、海外で開催された日本の美術に関する展覧会図録の寄贈を受けた（19年度受入実績130冊）。

ウ 所蔵作品データ等のデジタル化

館名	画像データ				テキストデータ				
	デジタル化件数	デジタル化累計	公開件数	目標公開件数	デジタル化件数	デジタル化累計	公開件数	目標公開件数	
東京国立近代美術館	本館	236	9,817	2,121	1,394	143	10,009	9,437	9,144
	工芸館	240	2,923	120	23	78	3,148	2,681	2,516
	フィルムセンター (映画関連資料)	0	0	—	—	8,707	93,978	—	—
京都国立近代美術館	500	5,850	730	517	717	9,345	8,006	5,612	
国立西洋美術館	2,100	3,870	202	202	17	4,515	4,303	4,058	
国立国際美術館	347	5,819	32	5	416	6,722	5,788	5,101	
計	3,423	28,279	3,205	2,141	10,078	127,717	30,215	26,431	

注 「公開件数」は、所蔵作品総合目録における画像及びテキストデータの公開件数である。なお、国立西洋美術館は「国立西洋美術館所蔵作品データベース」で画像データ1,908点を公開している。

エ インフォメーションデータセンター（IDC）の確立



		<p>前年度に東京国立近代美術館及び国立新美術館において整備されたV P N（暗号化された通信網）を国立美術館5館全体に採用するための詳細仕様を策定し、安全かつ高速な情報ネットワークの確立を平成20年度上半期において実施する体制を築いた。</p> <p>国立美術館所蔵作品総合目録検索システムはデータの追加更新を行うとともに、画像掲載の増加を図るため、前年度に許諾を得た日本画等の作品715点の画像を掲載するとともに、洋画について著作権許諾の手続きを開始した。</p> <p>国立美術館所蔵作品総合目録検索システムに掲載の全文字画像データ（上記著作権許諾作品の画像は除く）を正式公開版となった文化遺産オンラインの文化遺産データベースに提供し、文化遺産データベースからも国立美術館所蔵作品の情報の検索を可能にした。</p> <p>※1 S：特に優れた実績を上げている。（客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特長に応じて評定を付す。）  ※2 F：評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。（客観的基準は事前に設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評定を付す。）</p>																																						
	<p>ホームページのアクセス件数 【定量的に評価】</p>	<p>※1</p> <table border="1" data-bbox="913 395 1227 502"> <tr> <td>5,724,279件以上</td> <td>4,006,995件以上 5,724,279件未満</td> <td>4,006,995件未満</td> </tr> </table> <p>※2</p>	5,724,279件以上	4,006,995件以上 5,724,279件未満	4,006,995件未満	<p>A</p>	<p>実績：34,067,757件 （前中期平均：5,724,279件）</p>																																	
5,724,279件以上	4,006,995件以上 5,724,279件未満	4,006,995件未満																																						
	<p>図書室の利用者数 【定量的に評価】</p>	<p>5,374人以上 3,762人以上 5,372未満 3,762人未満</p>	<p>A</p>	<p>実績：123,700人 （前中期平均：5,374人）</p>																																				
	<p>コンテンツの提供 【参考指標】</p>	<p>目標となる前中期期間中の公開件数 26,431件 （所蔵作品数に対するデジタル化の割合 88.6%）</p>		<p>本中期期間中の累積公開件数 30,215件 （所蔵作品数に対するデジタル化の割合 94.5%）</p>																																				
<p>(4) 国民的美的感性の育成</p> <p>① 国立美術館における美術教育に関する調査研究の成果を踏まえ、学校や社会教育施設等との連携強化により、子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供し、各館の年間の平均参加者数や前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう、それらの参加者数の増加に積極的に取り組む。</p> <p>② ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図る。また、ボランティアの参加人数及び活動日数の増加に積極的に取り組む。</p> <p>③ 映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した教育普及活動に重点的に取り組む。</p>	<p>教育普及活動の実施状況 【定性的に評価】</p>	<p>(4) 国民的美的感性の育成</p> <p>① 幅広い学習機会の提供（講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等）</p> <table border="1" data-bbox="943 715 1525 917"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>実施回数</th> <th>参加者数</th> <th>目標数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館（本館）</td> <td>83</td> <td>4,759</td> <td>2,718</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館（工芸館）</td> <td>32</td> <td>1,229</td> <td>1,285</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館（フィルムセンター）</td> <td>146</td> <td>8,833</td> <td>1,470</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>40</td> <td>2,991</td> <td>1,590</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>142</td> <td>14,365</td> <td>5,582</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>56</td> <td>4,019</td> <td>2,340</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>200</td> <td>16,838</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>699</td> <td>53,034</td> <td>14,985</td> </tr> </tbody> </table> <p>ア 各館の特徴</p> <p>(ア) 東京国立近代美術館（本館）</p> <p>平成19年度は、研修を受けた教員が児童生徒を引率して来館したり、アーティスト・トークの内容が、解説ボランティアによって来館者に伝えられたりするなど、それぞれの事業が有機的に関連しあい、前年度と比して約1.4倍の参加者があった。また、夏休みのこども美術館（中学生プログラム）では、において、科学研究費補助金による共同研究の成果を活用した。</p> <p>(工芸館)</p> <p>平成19年度は「所蔵作品展 たんけん！ こども工芸館／現代のガラス」におけるパフォーマンス等、多種にわたるギャラリートーク・パフォーマンス等を開催し、体験的・参加型の鑑賞方法を提案することで親しみや関心が増し、スムーズな鑑賞を進めることができるように工夫した。</p> <p>また、「開館30周年記念展Ⅱ 工芸の力」では作家と研究員の対談形式のトークイベントを行い、専門性を深めながら一般の参加者にも分かりやすい内容となるよう努めた。</p> <p>さらに、単体制高校の受入れや児童・生徒向けプログラムを活用した夏休みの課題に協力するなど、初等・中等教育機関との連携を図った。</p> <p>(フィルムセンター)</p> <p>平成19年度は、トークイベントの増加が特筆される。特に「ウズベキスタン映画祭」では10日間の会期中の6日、「スウェーデン・ドキュメンタリー新作選」では8日間の会期中7日イベントを開催し、年間の開催数は約40回を数えた。また、「チャップリンの日本」展にあわせて開かれたトークイベントは、約150人の参加者を得る盛況となった。</p> <p>「こども映画館」は6年目を迎え、映画上映に施設見学や弁士・生演奏付きの無声映画上映などを組み合わせるスタイルが定着してきた。特に無声映画を上映する回では定員の150人を超える応募があった。</p> <p>そのほか、所蔵作品展「展覧会 映画遺産」の展示品のうち、日本映画史の基本的事項にかかわる資料を解説した子ども向けのセルフガイド（解説カード）を配付した。</p> <p>(イ) 京都国立近代美術館</p>	館名	実施回数	参加者数	目標数	東京国立近代美術館（本館）	83	4,759	2,718	東京国立近代美術館（工芸館）	32	1,229	1,285	東京国立近代美術館（フィルムセンター）	146	8,833	1,470	京都国立近代美術館	40	2,991	1,590	国立西洋美術館	142	14,365	5,582	国立国際美術館	56	4,019	2,340	国立新美術館	200	16,838	—	計	699	53,034	14,985	<p>A</p>	<p>学校との連携などにより、ギャラリートークやワークショップなど「作品を目の前にした」各種の講座等を、館内のスタッフによる活動としてしっかりと定着させたことは評価に値する。また、ボランティアや企業等との協力・連携についても努力が認められる。</p> <p>【より良い事業とするための意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学生・中学生・高校生への働きかけの強化が望まれる。</li> <li>・地域連携や企業連携は、実施するごとに新しい課題が生じ、すぐに成果でない事業も多いと考えられるが、単年度の成果に一喜一憂せず、長期の展望をもって着実に実施することが望まれる。</li> <li>・教育面で、国立博物館における教員内見会のような具体策をより積極的に試みるとともに、他方で、近現代的イメージをテーマとする国立美術館である以上、たんなるガイド発行ではなく、かつての国際美のようなアーティスト主催の事業も実施すべきであると考えられる。</li> <li>・地方の公立美術館の参考となるような美術館教育に関する取り組みを進めて欲しい。</li> <li>・教育機関に対するフィルムセンターの鑑賞授業など教育上映活動は、極めて有意義であるため、より一層の普及が期待される。</li> </ul>
館名	実施回数	参加者数	目標数																																					
東京国立近代美術館（本館）	83	4,759	2,718																																					
東京国立近代美術館（工芸館）	32	1,229	1,285																																					
東京国立近代美術館（フィルムセンター）	146	8,833	1,470																																					
京都国立近代美術館	40	2,991	1,590																																					
国立西洋美術館	142	14,365	5,582																																					
国立国際美術館	56	4,019	2,340																																					
国立新美術館	200	16,838	—																																					
計	699	53,034	14,985																																					

多様な鑑賞手法を研究するため「ギャラリー・ラボ2007」を開催した。期間を限り、コレクション・ギャラリーで「鑑賞のための会話を積極的に認める」、「子供連れの成人を無料にする」という設定を行い、館外のグループ、研究者たちが発案したプランに基づき、美術鑑賞の新しい形を探った。また、美術家による託児機能を備えた美術作品「ブレイルーム」を設置し、美術館に幼児を受け入れるための試みを行った。

(ウ) 国立西洋美術館

所蔵作品展をさまざまな切り口で楽しむFun with Collectionについて、平成19年度は「美術史・市場・修復編」と題し、所蔵作品の学術的研究や、マーケットでの取引、修復などに関わる人々を講師に迎え、新たな視点を参加者に提供した。

また、平成19年度は、普段美術館に足を運ばない層を美術館に呼び込むプログラムFUN DAY、障害者を対象とする鑑賞プログラム、都立高校の奉仕の課外授業の受け入れの3種類の新規事業を開始した。

企画展のない時期に美術館を無料開放して様々なプログラムを用意したFUN DAYは、好評を博し、当日の成果だけでなく、これが契機となってファミリープログラムへ応募する家族が出てくるなど、美術館が意図した未来の来館者発掘に貢献する結果を得ることができた。

障害を持つ人々に対するプログラムは、以前は要望があったときに対応するという形でしか実施してこなかったが、平成19年度から民間企業の協力を得て、継続的なプログラムとしてスタートした。

都立高校の奉仕の課外授業の受け入れについては、「絵でたのしむクリスマス」を生徒とともに行った。この事業を通じ、プログラムを実施する国立西洋美術館の職員、ボランティアスタッフ、さらにはプログラム参加者にとって、年齢層が広がることで活動の楽しさやコミュニケーションが活性化されることを実感できた。

(エ) 国立国際美術館

企画展ごとに講演会、ギャラリートークを実施するとともに、開館30周年記念シンポジウム「未完の過去 この30年の美術」を開催した。シンポジウムでは、国内外から専門家をパネリストとして招へいして、2日間にわたり開催し、合計830名の参加者を得た。また、平成19年度は新たに教員向け美術館活用ガイド「先生のための国立国際美術館活用ガイド」を作成した。

その他、以下の教育プログラムを実施した。

- ・鑑賞支援教材制作に関連した「ジュニアセルフガイド」の発行（ベルギー展、三十周年記念展の2回）
- ・大学の課外授業及びスクーリングによる団体鑑賞の受入れ
- ・小・中・高等学校団体鑑賞の受入れ
- ・教員研修の実施（6校 合計174名）

(オ) 国立新美術館

平成19年度は、講演会、ギャラリートーク等を計200回開催し、延16,000人強の参加者を得ることができた。

展覧会に関連した講演会やギャラリートークのほか、子供から大人まで幅広い層を対象にワークショップを実施した。新しい美術の動向を紹介するという美術館の活動方針に則り、ワークショップについては現在活躍中の作家や様々な分野のアーティスト等を講師に招いたプログラムを企画した。また、他機関との共催によるイベントや、海外の作家や美術関係者による講演会など、広く美術を普及するためのプログラムを実施した。この他、鑑賞ガイダンス及び施設ガイダンスを逐次実施した。

② ボランティアや支援団体の育成等による教育普及事業

ア ボランティアによる教育普及事業

館名	ボランティア登録者数	ボランティア参加者数	事業参加者数
東京国立近代美術館（本館）	24	402	3,676
東京国立近代美術館（工芸館）	24	189	2,464
京都国立近代美術館	29	241	—
国立西洋美術館	17	326	3,048
国立国際美術館	50	108	—
国立新美術館	76	252	—
計	220	1,518	9,188

イ 各館の特徴

(ア) 東京国立近代美術館

本館では、ガイドスタッフ発足5年を迎え、第3期スタッフの募集と採用者への研修を実施した。事業への参加者数も内容も安定し、沖縄県立博物館・美術館など、これからボランティアガイドを始めようとする他館が、見学に来館することが増加している。

工芸館のボランティアスタッフによるガイド「タッチ&トーク」は、リピーターやこれを目的とした来館者の増加から定着の段階に入った様子が窺われる。平成19年度も一般や子どもを対象とした事業のほか、英語トークや団体対応などを実施した。第3期スタッフの育成も始まり、平成20年度は総勢約30名と増員が見込める状況となった。

- (イ) 京都国立近代美術館  
ボランティアによる聞き取りアンケートの実施等の活動を行った。
- (ウ) 国立西洋美術館  
ボランティア活動は、プログラムの普及に合わせて実施回数も増加している。平成19年度は、クリスマスに実施するプログラムも新規に開始され、全体として充実した年となった。  
また、通年で継続的に活動を行うボランティアのほか、FUN DAYでの臨時ボランティアの採用(73人)や都立高校の奉仕の課外授業の受け入れ(5人)を実施するなど、ボランティアとの連携もより多様性のあるものとなった(参加者延べ数: FUN DAY臨時ボランティア92人、都立高校奉仕(絵でたのしむクリスマス)20人)。
- (エ) 国立国際美術館  
学生ボランティアを広く募り、教育普及事業の実施補助、広報資料の発送、図書資料等の整理などの美術館運営の補助業務を実施することを通して、美術館活動に接する機会を提供した。
- (オ) 国立新美術館  
学生ボランティアによる活動支援を呼びかけるため、サポート・スタッフ制度を実施した。教育普及事業から広報まで、幅広い活動に参加してもらうことにより、美術館の活動に関心を持つ学生(大学生、大学院生)に対し、美術館における様々な実務体験の機会を提供することができた。
- ウ 支援団体等の育成と相互協力による事業
- (ア) コンサート等の実施  
新国立劇場、京都市立芸術大学、東京のオペラの森実行委員会、ダイキン工業現代美術振興財団等との協力により、各館においてコンサートやオペラ、落語会、演劇などを開催した(38回)。
- (イ) ぐるっとバスへの参加  
東京の美術館・博物館等49館が実施する共通入館券事業「東京・ミュージアムぐるっとバス2007」及び関西の美術館・博物館等65館が実施する「ミュージアムぐるっとバス・関西2007」に参加し、所蔵作品展観料金の無料化などを実施した。また、平成20年度からは国立新美術館が参加することを決定した。
- (ウ) NPO法人との連携  
東京国立近代美術館において、平成20年1月2日にNPO法人美術ファンクラブとの連携により、本館所蔵作品展「近代日本の美術」の無料観覧を実施(入館者数1,218人)したほか、新たに工芸館「開館30周年記念展Ⅱ 工芸のカー21世紀の展望」の無料観覧を実施(入館者数2,313人)した。  
フィルムセンターでは、「東京フィルメックス」との共催が5年目を迎えた(平成19年度「第8回東京フィルメックス 山本薩夫監督特集」入館者数3,543人)本企画をきっかけとして、海外の映画祭やアーカイブ機関を対象としたフィルムの貸与が活発化するなど、日本映画の普及に成果を上げている。  
京都国立近代美術館においては、「アートリンク日米フォーラム 京都セッション(財団法人たんぼぼの家、エイブル・アート・ジャパン、Creative Clay Inc.、ミュージアム・アクセス・ビュー、京都造形芸術大学との連携)」及び「ミュージアム・アクセス・ビュー鑑賞ツアー(ミュージアム・アクセス・ビューとの連携)」を行った。
- (エ) 六本木地区の美術館等との連携・協力  
国立新美術館において、六本木地区の美術館等との連携・協力により、「六本木アート・トライアングルマップ」を作成・配布するとともに、六本木ヒルズとの連携・協力によりシャトルバスを運行した(平成19年3月5日～5月7日:土・日・祝日、平成19年7月28日～8月26日:火曜日を除く毎日)。
- (オ) 企業との連携  
国立西洋美術館では、セイコーエプソン株式会社とエプソン販売株式会社の支援を受け、OPEN museum(美術を通して人々が出会う開かれた美術館を旨とするプロジェクト)を発足し、美術館無料開放日「FUN DAY」の開催、映像ガイドの上映、クリスマスプログラムの実施等各種プログラムの充実を図った。本事業は、ナショナルセンターとして美術館と民間企業との連携のあり方や、新たな事業の方向性について提示することにも繋がった。  
国立国際美術館では、企業とのタイアップによる前売券の発券、企業等が発行する印刷物への展覧会情報の掲載等を以下のとおり実施し、企業との連携を進めた。
- a 次の展覧会情報誌に掲載し、同時に割引を実施。
    - ・「アサヒメイト」(発行:朝日友の会)
    - ・「STACIA ご優待ガイド」(発行:㈱阪急阪神カード)
    - ・「e-kenet LETTER」(発行:㈱京阪カード)
    - ・「レインボウファミリー」(発行:大阪市交通局)
  - b 英語・日本語併記の情報誌「MEET OSAKA」(発行:(財)大阪21世紀協会)に展覧会情報を掲載し、外国人旅行者に対する普及広報を実施。
  - c 近隣ホテル(リーガロイヤルホテル、ホテル阪急インターナショナル等)と連携し、広報誌への情報掲載及びホームページのリンク等を実施。
  - d 「Osaka メセナカード」と連携し、大阪府への普及広報を実施。

### ③ 映画フィルム・資料を活用した教育普及活動

フィルムセンターと京都国立近代美術館の共同開催により、京都国立近代美術館において、フィルムセンターの所蔵フィルムを用いたピアノ伴奏付き無声映画上映会「京都国立近代美術館+東京国立近代美術館フィル

	<p>講演会、ギャラリートーク、アーティストトーク等の年間平均参加者数 【各館ごとに定量的に評価】</p>	<p>ムセンター共催フィルム・プロジェクト キックオフ記念イベント[フランス無声映画上映会]「鉄路の白薔薇」を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・京都国立近代美術館+東京国立近代美術館フィルムセンター共催フィルム・プロジェクト キックオフ記念イベント[フランス無声映画上映会]「鉄路の白薔薇」(1回) 137人</li> </ul> <p>また、児童生徒を対象として継続して実施している「こども映画館」は、児童・生徒を対象とした単なる上映企画にとどまらず、上映・展示・研究員の解説を組み合わせて映画に関する子どもたちの感性・知識を高めるべく構成された映画教育プログラムとなっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「こども映画館 2007年の夏休み」(4回) 378人</li> <li>・相模原市内の小・中学生を対象とした上映会(由野台中学校)(2回) 220人</li> </ul> <p>※1 S : 特に優れた実績を上げている。(客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特色に応じて評定を付す。) ※2 F : 評価委員会として業務運営の改善その他の助言を行う必要がある。(客観的基準は事前に設けず、業務改善の助言が必要と判断された場合に限りのFの評定を付す。)</p> <table border="1" data-bbox="806 411 1659 880"> <tr> <td>※1</td> <td>2,718人以上</td> <td>1,903人以上 2,718人未満</td> <td>1,903人未満 2,718人未満</td> <td>※2</td> <td>実績: 4,759人 (前中期平均: 2,718人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1,285人以上</td> <td>900人以上 1,285人未満</td> <td>900人未満</td> <td></td> <td>実績: 1,229人 (前中期平均: 1,285人)</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1,470人以上</td> <td>1,029人以上 1,470人未満</td> <td>1,029人未満</td> <td></td> <td>実績: 8,833人 (前中期平均: 1,470人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1,590人以上</td> <td>1,113人以上 1,590人未満</td> <td>1,113人未満</td> <td></td> <td>実績: 2,991人 (前中期平均: 1,590人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>5,582人以上</td> <td>3,907人以上 5,582人未満</td> <td>3,907人未満</td> <td></td> <td>実績: 14,365人 (前中期平均: 5,582人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2,340人以上</td> <td>1,638人以上 2,340人未満</td> <td>1,638人未満</td> <td></td> <td>実績: 4,019人 (前中期平均: 2,340人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td></td> <td>実績: 16,838人 (前中期平均: -人)</td> <td></td> </tr> </table>	※1	2,718人以上	1,903人以上 2,718人未満	1,903人未満 2,718人未満	※2	実績: 4,759人 (前中期平均: 2,718人)	A		1,285人以上	900人以上 1,285人未満	900人未満		実績: 1,229人 (前中期平均: 1,285人)	B		1,470人以上	1,029人以上 1,470人未満	1,029人未満		実績: 8,833人 (前中期平均: 1,470人)	A		1,590人以上	1,113人以上 1,590人未満	1,113人未満		実績: 2,991人 (前中期平均: 1,590人)	A		5,582人以上	3,907人以上 5,582人未満	3,907人未満		実績: 14,365人 (前中期平均: 5,582人)	A		2,340人以上	1,638人以上 2,340人未満	1,638人未満		実績: 4,019人 (前中期平均: 2,340人)	A		-	-	-		実績: 16,838人 (前中期平均: -人)		
※1	2,718人以上	1,903人以上 2,718人未満	1,903人未満 2,718人未満	※2	実績: 4,759人 (前中期平均: 2,718人)	A																																														
	1,285人以上	900人以上 1,285人未満	900人未満		実績: 1,229人 (前中期平均: 1,285人)	B																																														
	1,470人以上	1,029人以上 1,470人未満	1,029人未満		実績: 8,833人 (前中期平均: 1,470人)	A																																														
	1,590人以上	1,113人以上 1,590人未満	1,113人未満		実績: 2,991人 (前中期平均: 1,590人)	A																																														
	5,582人以上	3,907人以上 5,582人未満	3,907人未満		実績: 14,365人 (前中期平均: 5,582人)	A																																														
	2,340人以上	1,638人以上 2,340人未満	1,638人未満		実績: 4,019人 (前中期平均: 2,340人)	A																																														
	-	-	-		実績: 16,838人 (前中期平均: -人)																																															
<p>(5) 調査研究成果の反映 各館の役割・任務に加え、展示、教育普及その他の美術館活動の推進のため、計画的に調査研究を実施するとともに、これらの成果を確実に美術館活動に反映させる。なお、実態に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関とも連携を図るものとする。</p>	<p>調査研究の実施状況 【定性的に評価】</p>	<p>(5) 調査研究成果の美術館活動への反映 平成19年度業務実績報告書を参照。</p>	<p>B</p> <p>国立美術館の枠をこえた、地方の美術館との連携や大学などの連携が多いこと及び「日本彫刻の近代」の図書化や国際的シンポジウムの開催など、充実した取り組みは評価に値するものと考えられる。</p> <p>【より良い事業とするための意見】 調査研究については、欧米の水準と比較して、努力すべ点が多い。企画展の準備活動として実施された調査を展覧会カタログ上の論考とするだけにとどまらず、学会誌の投稿、発表、論文の作成、法人における研究紀要の査読制の推進や共同発行などの実現に向けて、さらなる一層の努力が望まれる。</p>																																																	
<p>(6) 快適な観覧環境の提供 ①-1 高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な鑑賞環境の形成のために展示方法・外国語表示・動線等の改善、施設の整備を計画的に行う。 ①-2 展示や情報パネルを工夫するとともに、音声ガイド等を導入するなど、鑑賞しやすさ、理解のしやすさに配慮する。 ② 入館者を対象とする満足度調査を定期的に行い、入館料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善に努める。 ③ 入館者にとって快適な空間となるよう、利用者ニーズを踏まえてミュージアムショップやレストラン等の充実を図る。</p>	<p>観覧環境の提供 【定性的に評価】</p>	<p>(6) 快適な観覧環境の提供 ① 高齢者、身体障害者、外国人等への対応 各館とも次のような対応を実施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多目的(障害者用)トイレ、エレベーター(エスカレーター)、スロープ(手摺り)の設置</li> <li>・車椅子、ベビーカーの貸出</li> <li>・自動体外式除細動器(AED)の設置</li> <li>・盲導犬、介助犬の同伴による観覧</li> <li>・多言語による館案内表示</li> <li>・多言語による館内リーフレット、ミュージアムカレンダー等の配布</li> <li>・東京都が実施する「ウェルカムカード」に参加し、外国人来館者の所蔵作品展観覧料金を割引(国立新美術館を除く。)</li> </ul> <p>その他、東京国立近代美術館工芸館では、観覧者の休憩のため、工芸館の雰囲気に合わせて北欧のデザイナーによる椅子を展示室に配置した。</p>	<p>A</p> <p>キャンパスメンバーズ制度など、改善がみられ、全般に期待をみえず活動となっている。中でも、常設展での音声ガイドは、従来の企画展(特別展)中心のあり方を打ち破る野心的な試みであり、全国の美術館の良き手本となっているものと考えられる。</p> <p>【より良い事業とするための意見】 若者層が滞留できるセルフサービスのスペースや一般の入館者がゆったりと休める空間の実現のほか、無料開放日の増加などについて検討することが望まれる。ただし、新たなサービスを企画する際には、計画性や現状を把握したうえで実現する必要がある。</p>																																																	

京都国立近代美術館では、英・日併記の情報誌「MEET OSAKA」（発行：（財）大阪21世紀協会）に展覧会情報を掲載した。

国立西洋美術館では、風除扉の自動扉化、杖の貸出、国立西洋美術館ホームページに視覚障害者向けの音声案内機能の整備等の取組を実施した。

国立国際美術館では、貸出用拡大鏡（16個）、授乳室及び安全仕様のキッズルームを地下1階に設置し、幼児向け絵本400冊を所蔵作品した。また、同キッズルームでは託児サービスを実施し、快適な鑑賞環境の確保に努めた。

国立新美術館では、授乳室の整備、点字ブロック及び点字表示（エレベーター内他）の整備、補聴器等への磁気誘導無線システムを講堂に設置、館内ディスプレイによる展覧会や講演会等の情報の表示、身障者用駐車場の整備等の対応がなされているが、これらに加え託児サービスの試行、案内サインの充実、オストメイト対応のトイレの設置、貸出用車椅子及びベビーカーの数の充実などの取組を行った。

## ② 展示、解説の工夫と音声ガイドの導入

各館とも次のような対応を実施している。

- ・共催展における音声ガイドの導入
- ・館内リーフレット、フロアプラン、ミュージアムカレンダー等の配布

その他、東京国立近代美術館本館では、平成19年4月から所蔵作品展に音声ガイドを導入した。

工芸館では、作品のキャプションについて、サイズの拡大、作品名のふりがなを記載、素材・技法を明記するなどの改善を行った。

フィルムセンターでは、展覧会の開催に際し、展示作品の出品目録を配布（「ステル写真でみる日本の映画女優」（3回）、「チャップリン秘書・高野虎市遺品展」（1回）、「マキノ映画の軌跡」（1回）、計5回）した。また、携帯電話サイトによる上映番組案内等の発信を実施した。「映画の広場」において、大型ディスプレイにより、上映作品や展覧会情報を提供した。

国立西洋美術館においては、上野公園の諸施設と連携したイベントにおける講演会及びパンフレット無料配布の実施、音声と動画を併用した所蔵作品展示ガイドの試作品の制作、重要文化財指定に伴い作成した「建築探検マップ」の無料配布などの取組を実施した。また、OPEN museum 事業として、本館ロビーにおけるガイド映像コーナーの新設、クイズラリー、所蔵作品展作品リストやパンフレット等の配布などの取組を実施したほか、「国際博物館の日」を記念し、上野地区の諸機関と連携してミュージアムラリーを実施し、参加者へのプレゼント（抽選）として、所蔵作品展無料観覧券を提供した。

国立国際美術館においては、作品紹介キャプションを縦型に拡大し、活字をより見やすくした。

国立新美術館においては、「安齋重男の“私・写・録”1970-2006」展鑑賞ガイドブック「アートのとびら vol. 2」（日英併記）や、「アーティスト・ファイル2008—現代の作家たち」展鑑賞ガイドブック「ちいさなアーティスト・ファイル2008」（日英併記）を配布した。

## ③ 入場料金、開館時間等の弾力化

文化の日（11月3日）及び国際博物館の日（5月18日）の観覧料の無料化（国立新美術館を除く。）を実施するとともに、開館時間等については、夜間開館の実施、年始やゴールデンウィーク等休館日の臨時開館を実施した。また、所蔵作品展及び自主企画展について、高校生及び18歳未満の方の観覧料を無料とすることを決定し、平成20年4月1日を会期に含む展覧会から実施した。

その他の各館における取組は以下のとおりである。

(ア) 東京国立近代美術館（本館・工芸館）

- ・本館・工芸館の所蔵作品展及びフィルムセンターの展示室を何度でも観覧できるMOMATパスポートの販売
- ・年始は1月2日（「美術館へ行こう～A Day in the Museum」の実施）から開館
- ・フィルムセンターにおいて、1日の上映回数を弾力化

(イ) 京都国立近代美術館

- ・京都市駐車場公社と連携による駐車場料金の割引
- ・関西文化の日（11月17日、11月18日）の観覧料の無料化

(ウ) 国立西洋美術館

- ・春の企画展開催日から秋の企画展閉会日までの開館時間の延長、共催展及び自主企画展における割引引換券及び前売券の発行、クレジットカードによる入館券販売、夏休み子ども音楽会「上野の森文化探検」（主催：東京文化会館（東京都歴史文化財団）ほか）参加者の所蔵作品展観覧料無料（平成19年8月3日（金）のみ）等の取組の実施
- ・OPEN museum 事業の一環として、美術館無料開放日「FUN DAY」を開催し、ギャラリートークや建築ツアー等美術館を楽しむためのプログラムを実施（期間：平成19年5月12日（土）～5月13日（日））
- ・OPEN museum 事業の一環として、「Museum X' mas in 国立西洋美術館《美術館でクリスマス》」（期間：平成19年11月23日（金・祝）～平成20年1月6日（日））における、前庭のイルミネーション装飾やポストカード等のプレゼントなど各種プログラムの開催と、前庭開放時間の延長を実施
- ・OPEN museum 事業の一環として、光彩時空'07—光はミュージアムから—期間中（期間：平成19年10月30日（火）～11月4日（日））、毎日午後8時まで所蔵作品展の夜間開館を実施
- ・Suica 電子マネーサービスをチケット販売、ミュージアムショップ及びレストランにおいて導入
- ・「国際博物館の日」に、建築ツアーを実施するとともに上野地区の美術館・博物館を巡るミュージアムラリーや上野のれん会各店舗の割引等の特典が受けられるクーポンサービスを実施

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和の日（４月２９日）、FUN DAY（５月１２、１３日）、国際博物館の日（５月１８日）、の所蔵作品展観覧料の無料化</li> <li>（エ）国立国際美術館</li> <li>・昭和の日（４月２９日）、国際博物館の日（５月１８日）、関西文化の日（１１月１７日、１８日）の所蔵作品展観覧料の無料化</li> <li>・文化の日（１１月３日）の所蔵作品展及び企画展観覧料の無料化</li> <li>・企画展開催期間中の金曜日に夜７時まで夜間開館を実施。</li> <li>・ゴールデンウィーク期間中の５月１日を臨時開館</li> <li>・レストランで昼食をとり、再度入場したいという要望にこたえ、当日に限り再入場を許可</li> <li>（オ）国立新美術館</li> <li>・「平成１９年度（第１回）文化庁メディア芸術祭」の観覧料の無料化</li> <li>・六本木アート・トライアングル参加館との観覧料の相互割引及び共通マップの作成・配布</li> <li>・当館使用の公募団体展との観覧料の相互割引</li> <li>・東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる観覧料割引</li> <li>・ペア観覧券等による観覧料割引</li> <li>・円滑な入場のため日時指定券を導入</li> <li>・「モディリアーニ展」での高校生無料観覧日の設定</li> </ul> <p><b>④ キャンパスメンバーズ制度の実施</b> 平成１８年１２月より、国立美術館全体の事業として発足した。大学、短期大学、高等専門学校、専修学校等を対象とした会員制度「国立美術館キャンパスメンバーズ」について、メンバー校は３５校、各館利用者数は３８、５３９名となった。メンバー校の学生及び教職員が制度を有効に活用できるようポスターを制作し、加盟大学等へ送付する等の取組を行い、周知広報に努めた。</p> <p><b>⑤ ミュージアムショップ、レストラン等の充実</b> ミュージアムショップについては、東京国立近代美術館工芸館における開館３０周年記念オリジナルグッズの制作・販売、京都国立近代美術館では、ワンコインで購入可能な商品の販売、国立西洋美術館では、薔薇のチョコレートショップ「メサージュ・ド・ローズ社」との連携による「ばら」の絵からイメージしたチョコレートなどオリジナルな新商品の開発、国立国際美術館では、オリジナルグッズの充実のほか、企画展に合わせた書籍販売等来館者のニーズに合わせた運営、国立新美術館では、ミュージアムショップに併設しているミニギャラリー（ＳＦＴギャラリー）展を６回開催するなどの取組を行った。 また、国立西洋美術館では国立美術館巡回展の実施に伴い、会場である姫路市立美術館と松本市美術館でもグッズを販売し、好評を得た。 レストランについては、京都国立近代美術館、国立西洋美術館及び国立国際美術館では、企画展に関連した料理をメニューに取り入れた。国立新美術館では、展覧会に合わせたメニューの提供のほか、混雑緩和のため時間指定券を配布するなど、利用環境の向上に努めた。</p>		
<p>(7) 国立新美術館の開館 我が国の美術館造活動の活性化を推進するため、「国立新美術館」を平成１９年１月に開館し、これに向けて体制整備、展示等の実施準備を進める。</p>	<p>国立新美術館の開館 【定性的に評価】</p>	<p>(7) 国立新美術館の開館 平成１９年度限りの事項。</p>		

## 2. 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承

### 評定 A

中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。

### 評価のポイント

収蔵庫の狭隘化及び老朽化などの様々な課題を抱えつつも、限られた予算内において各館にふさわしい作品の収集に努めており、収集成果をあげているものと認められる。

中期計画の各項目	評価項目	評価基準					主な実績及び自己評価	評定	評価委員会によるコメント																																																					
		S	A	B	C	F																																																								
<p>(1)-1 以下に掲げる各館の収集方針に沿って、体系的・通史的バランスのとれた所蔵作品の蓄積を図る。 なお、作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適宜適切な購入を図る。 また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機敏性の向上に努める。 (東京国立近代美術館) 近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関しては所蔵作品より近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるよう、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムの収集に努めるとともに複製等による復元を図る。 (京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。 その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域に立脚した所蔵作品の充実にも配慮する。 (国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実、近世ヨーロッパの絵画の充実及びヨーロッパ版図の系統別収集を行う。 (国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、国際的な交流が盛んになった1945年以降の国内外の美術並びに同時代の先駆的な美術を中心に、総合的な関係性を踏まえつつ、体系的に収集する。</p> <p>(1)-2 所蔵作品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極活用を図る。</p> <p>(1)-3 各館の収集方針に則しつつ、緊密な情報交換と連携を図りながら、国立美術館全体のコレクションの充</p>	<p>収蔵品の収集 【定性的に評価】</p>	<p><b>2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承</b> <b>(1) 美術作品の収集</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-bottom: 10px;"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入点数</th> <th>購入金額 (千円)</th> <th>寄贈点数</th> <th>年度末 所蔵作品数</th> <th>年度末 寄託品数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館(本館)</td> <td>57</td> <td>184,633</td> <td>86</td> <td>9,633</td> <td>243</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館(工芸館)</td> <td>20</td> <td>7,016</td> <td>58</td> <td>2,671</td> <td>132</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>49</td> <td>144,729</td> <td>668</td> <td>9,345</td> <td>2,167</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>16</td> <td>190,530</td> <td>1</td> <td>4,515</td> <td>13</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>32</td> <td>290,451</td> <td>40</td> <td>5,825</td> <td>76</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>174</td> <td>817,359</td> <td>853</td> <td>31,989</td> <td>2,631</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入本数</th> <th>購入金額 (千円)</th> <th>寄贈本数</th> <th>年度末 所蔵本数</th> <th>年度末 寄託品本数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館 (フィルムセンター)</td> <td>285</td> <td>209,323</td> <td>2,834</td> <td>51,594</td> <td>7,048</td> </tr> </tbody> </table> <p>ア 収集作品の特徴 (ア) 東京国立近代美術館 (本館) ①1950年前後の欧米の代表的作家の絵画作品、②比較的手薄な昭和戦前期の日本画など歴史的な作品の補充、③近年新たに勃興しつつある、比較的若い世代の作家による映像作品や写真作品、④パブリックスペースに設置する作品の収集に努めた。 また、小茂田青樹、ポロック、宮脇愛子、谷中安規らの入手困難な作例を含め、海外の代表的作家の作品、日本人作家については歴史的作品、現存のベテラン作家、中堅・若手作家の作品を各分野に渡りバランス良く購入した。 ポロックの作品は、世界的にも希少なものであるにもかかわらず、作家の遺族が運営する財団と直接交渉することにより市場価格より低い価格で購入を実現できた。 ジュリアン・オビーの映像作品「日本八景」を購入し2階ロビーに設置するなど、メディアアートの収集・展示に取り組むとともに、パブリックスペースにおける展示作品の充実を図った。 寄贈作品については、岸田劉生の「麗子六歳之像」等、今後の美術館活動に資する作品が寄贈された。 谷中安規作品の購入・寄贈計54点の収集は、所蔵者との永年にわたる信頼関係の醸成の成果である。 (工芸館) ①明治、大正、昭和初期の工芸作品を拡充(西浦園治等)、戦後の代表作(岡部禎男・八木一夫等)の系統的な収集、②近代の主要な外国作家(ハンス・コバー等)の作品の収集、③近代デザイン史上の重要作品(リチャルト・レーマーシュミット、アルヴァー・アールト等)の系統的な収集という方針に基づき収集を行った。</p>					館名	購入点数	購入金額 (千円)	寄贈点数	年度末 所蔵作品数	年度末 寄託品数	東京国立近代美術館(本館)	57	184,633	86	9,633	243	東京国立近代美術館(工芸館)	20	7,016	58	2,671	132	京都国立近代美術館	49	144,729	668	9,345	2,167	国立西洋美術館	16	190,530	1	4,515	13	国立国際美術館	32	290,451	40	5,825	76	計	174	817,359	853	31,989	2,631	館名	購入本数	購入金額 (千円)	寄贈本数	年度末 所蔵本数	年度末 寄託品本数	東京国立近代美術館 (フィルムセンター)	285	209,323	2,834	51,594	7,048	A	<p>限られた予算内においてナショナルコレクションの形成は厳しい現状にあるが、各館にふさわしい作品の収集に重点を絞るなど最大限の努力をしていると認められ、法人全体として優秀な水準を維持している。</p> <p>【より良い事業とするための意見】 ナショナルセンターとして、建築、メディアアート、デザイン関連資料などの分野も含めてナショナルコレクションの収集方針の確立に向けて検討することが望まれる。</p>
館名	購入点数	購入金額 (千円)	寄贈点数	年度末 所蔵作品数	年度末 寄託品数																																																									
東京国立近代美術館(本館)	57	184,633	86	9,633	243																																																									
東京国立近代美術館(工芸館)	20	7,016	58	2,671	132																																																									
京都国立近代美術館	49	144,729	668	9,345	2,167																																																									
国立西洋美術館	16	190,530	1	4,515	13																																																									
国立国際美術館	32	290,451	40	5,825	76																																																									
計	174	817,359	853	31,989	2,631																																																									
館名	購入本数	購入金額 (千円)	寄贈本数	年度末 所蔵本数	年度末 寄託品本数																																																									
東京国立近代美術館 (フィルムセンター)	285	209,323	2,834	51,594	7,048																																																									

<p>実を努める。</p>		<p>購入作品については、平成16年度に開催した「非情のオブジェ」展出品のボディル・マンツや高橋禎彦、高見澤英子、上原美智子らの現代作家の作品と、大正から昭和期を代表した藤井達吉の大正期の金工作品、近代デザイン史上で重要な役割を担ったアルヴァー・アールトのデザイン作品を収蔵した。</p> <p>寄贈作品については、今日の伝統工芸を担ってきた陶芸の井上萬二、三浦小平二、染織の小宮康孝、戦後の日展を代表する漆芸の高橋節郎や中川哲哉、染織の木村雨山の主要作品のほか、漆芸の黒澤千春や染織の釜我敏子ら現代作家の作品の寄贈を受けたほか、創作的な人形の草創期である昭和初期頃から戦後の日展にかけて活躍した五味文郎の代表作を受け入れた。</p> <p>(フィルムセンター)</p> <p>アメリカ・ロサンゼルスのみ全米日系人博物館から、国内において残存が確認されていない貴重な戦前日本劇映画を含む124本を受贈した。また、ユニフランスから、近年のフランス映画の日本語字幕付プリント199本を受贈した。川喜多記念映画文化財団からは、これまで残存が確認されていなかったマキノ正博他監督「肉体の門」や、日本の文化記録映画史に大きな足跡を残した柳沢寿男監督作品の原版等を受贈した。映画関連資料については、フランス映画社から外国映画雑誌3、662冊を受贈し、アメリカ、フランス、イギリスの主要な映画雑誌がまとまった形で同時に寄贈される初めての例となった。株式会社日本映画新社からは映画カメラ等の撮影関連機材を、株式会社育映社からはフィルム焼付け機などの現像関連機材の寄贈を受け入れた。</p> <p>(イ) 京都国立近代美術館</p> <p>体系的展観のために補うべき重要作家の作品収集に努めるとともに、関西を拠点として活躍した現代美術家の作品収集が遅れている点を配慮し、重点課題とした。</p> <p>購入作品については、日本画では入江波光、岡本神草、村上華岳など、油彩画では麻生三郎、三島喜美代、横尾忠則など、陶芸では八木一夫、加守田章二などを購入し、所蔵作品の欠落部分を補うことが出来た。また、森村泰昌、イチハラ・ヒロコ+箭内新一など現代美術の作品を収集した。</p> <p>寄贈作品については、平成18年度から19年度にかけて池田満寿夫の遺族から主要作品を網羅した809点の寄贈を受け入れ、日本で最も充実した池田満寿夫コレクションを形成することができた。</p> <p>(ウ) 国立西洋美術館</p> <p>購入作品については、昭和55年度購入のディルク・パウツ派「荊冠のキリスト」の対作品であった「悲しみの聖母」を購入し、二連祈念画の形式を再現することが可能になった。また、戦前に日本へもたらされた旧松方コレクションのセガンティニ「羊の剪毛」を購入した。15世紀から19世紀にわたるドイツ・フランドル・フランスの版画を購入し、版画コレクションを充実した。</p> <p>寄贈作品については、旧松方コレクションの素描作品「兵士と家族」（作者不詳）の寄贈を受け入れた。</p> <p>(エ) 国立国際美術館</p> <p>日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、①1945年以降の日本の現代美術の系統的収集、②1945年以降の欧米の現代美術の系統的収集、③国際的に注目される国内外の同時代の美術の収集を行った。</p> <p>既に収蔵済みの作品との対比という点からも購入が望まれていた舟越桂の彫刻作品「傾いた雲」を購入したほか、美術作品購入費の本部留保分を活用し、モーリス・ルイスの大作「N u n」を収蔵した。また、アントン・ヘニグ等の現代の意欲的作品を購入した。</p> <p>寄贈作品については、これまで収蔵する機会に恵まれなかったヨーゼフ・ボイスの作品について、まとまった作品が寄贈された。</p>	
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世に伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵率等保存施設の狭隘・老朽化への対応に積極的に取り組む。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の取扱い対策の推進・充実を図る。</p>	<p>収蔵品の保管・管理 【定性・計量的評価】</p>	<p>(2) 収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応と適切な保存環境の整備等</p> <p>① 収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応</p> <p>ア 東京国立近代美術館</p> <p>本館では、比較的堅牢な彫刻作品の一部を外部の民間倉庫に保管することで必要スペースを確保してきたが、今年度は絵画作品の一部についても移送せざるを得なくなった。</p> <p>工芸館では、保管スペースの確保がやや困難となった期間が生じたが、ケースの効率的な活用等の工夫で対応した。なお、企画展準備に際して保管スペースの確保が困難となることあり、計画的な対応が必要となる。</p> <p>フィルムセンターでは、毎年度のフィルムの収集本数を勘案すると、今後5～6年程度で収納能力の限界に達することが見込まれている。仮に、大量の寄託申し入れがあった場合などは今中期計画期間中に収納能力の限界に達することも考えられるほか、フィルムの種別毎に収納の部屋を区分して温湿度管理を行う必要があることから、同一種類の大量フィルムの寄託等があった場合は、収納限界に達する前にも管理上の困難が生じることも予想される。また、可燃性フィルムの保存については、原版としての重要性和素材の特殊性とを斟酌して、最適な保存施設を確保する必要がある。</p> <p>なお、内部の独立検討会において、収蔵施設・設備等の拡充についても併せて検討を行った。</p> <p>東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館に隣接する「キャンプ淵野辺留保地」の利用について、相模原市、宇宙航空研究開発機構及び東京国立近代美術館の3者で将来的な利用計画について協議を行った。</p> <p>イ 京都国立近代美術館</p>	<p>A</p> <p>各館ともに、収蔵庫施設の狭隘・老朽化が著しいが、このような悪条件下で努力・工夫を重ね、現状を克服していることは評価に値するものと考えられる。また、保存環境の整備についても昨年に準じて適切に実施されているものと認められる。</p> <p>【より良い事業とするための意見】</p> <p>今後は、限られた収納空間の効率的な活用の他に、新たな空間の確保も必要である。国民の貴重な美術品を保存する「ナショナルセンター」としての役割を考慮すれば、民間の活用、地方に展示と収蔵の可能な施設を設けるなど、中期的な考え方にたった抜本的な対策を早急に検討する時期にあると考えられる。</p>



		<p>平成19年度から平成20年度にかけて行われる、収蔵ラック改修工事の1年目が完了し、収蔵場所にわずかながら余裕ができた。</p> <p>ウ 国立西洋美術館 平成19年度から20年度にかけて新館空調設備改修工事を実施し、収蔵庫及び展示室の環境を向上する。平成19年度は改修方針を決定し設備・建築設計を行い、撤去工事を実施した。</p> <p>エ 国立国際美術館 既に収蔵スペースの許容量に達している状況であるが、収納方法を工夫し作品の保存環境を維持している。今後、新たな収納ケースの整備等、対応の検討が必要となる。</p> <p><b>② 保存環境の整備等と防災対策の推進・充実</b></p> <p>ア 東京国立近代美術館 (本館) 組織体制の変更に伴い、防災訓練のマニュアルの見直しを検討した。 (工芸館) 防火ダンパーの増設や老朽化した箇所の消防設備を整備・充実させた。 (フィルムセンター) 消防用設備、蓄電池設備、自家発電設備の点検を年2回ずつ実施し、不具合等を発見した場合は直ちに修理、整備を実施している。また、事務室内の非常放送設備には、非常時の取扱いに困らないように取扱説明書を掲示している。 また、保安警備管理業務に新たに現場責任者を置くことにより、定期巡回及び監視等の強化を図った。 収蔵庫の消火設備は、フィルムセンターでは二酸化炭素消火設備を設置、相模原分館収蔵庫ではハロゲンガス消火設備を設置し、万全を期している。</p> <p>イ 京都国立近代美術館 消防設備の定期的な保守を実施するとともに、職員や看視員を含めた消防訓練を行なった。</p> <p>ウ 国立西洋美術館 新館空調設備改修工事により、新館展示室のうち2つを準収蔵庫として災害等の非常時に対応可能な仕様に変更する方針を決定した。 また、震災対策として、所蔵彫刻作品のための免震滑り板付き台座の製作を行った。</p> <p>エ 国立国際美術館 各種の防災設備による防災対策を維持するための点検を実施した。また、新築移転から3年目を迎え、法令により定められた特殊建築物及び電気系統の綿密な点検を実施し、維持管理に努めた。併せて、職員、警備員、看視員等による全館避難訓練を実施した。</p>	
<p>(3) 修理・修復に関しては、各館の連携を図りつつ、外部の保存科学の専門家等とも連携して、所蔵作品の保存状況を確実に把握し、修理・修復の計画的実施に努める。</p>	<p>収蔵品の修理 【定性的に評価】</p>	<p><b>(3) 所蔵作品の修理・修復</b></p> <p>① 東京国立近代美術館 絵画38件、水彩・素描16件、版画7件、彫刻1件、工芸5件、映画フィルムデジタル復元4本、映画フィルム洗浄1本 (本館) 状態の脆弱さから展示できなかった石山太柏、三田康らの作品について大規模修復を実施し展示を可能にした。 外部の保存修復の専門家と連携し、洋画の全点点検を開始するとともに、作品貸与時の点検・梱包立ち合い補助を試験的に依頼した。大規模な修復に際しては、2人以上の外部の専門家から所見を得ることとした。 (工芸館) 展示等の活用の頻度が高かつ重要な作品である染織作品5点の現状保存修復を行った。稲垣稔次郎の型染作品「結城紬地型絵染着物 竹林」等4点は、染料が弱いうえに脱色があり金箔押し装飾もあることで慎重な作業となったが、シミや黴、汚れの修復や丸洗いによる現状保存修復がなされた。中村勝馬の友禅作品「一越縮緬地友禅留袖 雲文」は、酸化変色と汚れと黴が全体におよび生地が弱っているために時間をかけてより慎重な作業を行った。 染織作品は、緊急度の高い作品から計画的に現状保存修復を行っており、外部の専門家とともに綿密な作品点検と修復計画の策定を検討した。 (フィルムセンター) 映画フィルムのデジタル復元、洗浄のほか、ノイズリダクション等47本、不燃化作業91本を実施した。 最初期の日本アニメーション映画「なまくら刀」(1917年)及び「浦島太郎」(1918年)のデジタル復元・染色復元を実施した。 フィルムとSP盤レコードを同期させて再生するレコード・トーキー作品「児童唱歌映画 村祭」(1929年)について、画・音両方のデジタル復元を行った。また、レコード・トーキー作品「國歌 君か代」(1931年)については、音をデジタル処理する一方、画については本来の映画スピードである秒間16コマ用のフィルムと、秒間24コマ用のフィルムの2本を作成し、それぞれをデジタル処理して相互比較を行った。 日本文化記録映画「アジアはひとつ」(1973年)について、劣化したサウンド用磁気テープを復元するとともに、上映用ポジプリントの復元を行った。</p>	<p>A</p> <p>各ジャンルの特殊な分野の修理・修復について、緊急度の高い作品から着実に実施しており、良好な水準にあるものと認められる。</p> <p>【各館個別事項】 東近美工芸館の染色作品の修復は、計画策定の点でも評価できる。</p> <p>【より良い事業とするための意見】 外部の専門家等との連携・協力は必須であるが、一方で、国立美術館における特殊な分野の修理・修復技術の継承及び向上への工夫が必要である。保存・修理体制について、法人として取り組むことができる今後の方向性を検討する時期にあると考える。</p>

		<p>初の17.5mmフィルムの復元となった「赤垣源蔵」（1936年）について、35mmフィルムによる復元を実現した。</p> <p>日本劇映画「忠活活殺剣」（1936年）について、映写等により著しく劣化した所蔵無声版16mmプリントと、プラネット映画資料図書館より借用した可燃性35mmプリントを、カット単位で綿密に照合し、最長版の作成を行った。</p> <p>② 京都国立近代美術館      絵画78件、水彩・素描5件、版画16点      展覧会開催のため、平成18年度から19年度にかけて当館に寄贈された池田満寿夫の版画作品809点のうち約半数を修復した。</p> <p>③ 国立西洋美術館      絵画2件、彫刻15件、資料・その他5件      マツオーラ「ウェヌスとアモル」の修復処置を行い、「バルマ展」に出品した。また、巡回展に出品する絵画彫刻作品の処置を時間を掛けて行った。このほか、長期間、所蔵作品展に出品していた彫刻作品の表面保護処理を行っている。前庭彫刻は2年おきに表面保護処置を行っている。      所蔵作品の修復に当たっては、外部の専門家との連携により作業を実施した。</p> <p>④ 国立国際美術館      絵画1件、水彩・素描3件、版画16件      「開館三十周年記念展」の開催に先立ち、当館の所蔵作品全体を再確認し、展示に使用する作品及び早急な修復対応が必要な作品について修復修復を実施した。特に紙支持体作品については、紙に関する作品を専門とする外部の修復家と連携し、適切に修復修復を行った。</p>	
<p>(4) 各館の方針に従い、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を計画的に行い、その成果を業務に反映させる。      なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館等及び大学等の機関とも連携を図るものとする。</p>	<p>収集・保管のための調査研究      【定性的に評価】</p>	<p><b>(4) 美術作品の保管・修理等に関する調査研究</b>      各館における調査研究の実施状況は、以下のとおりである。</p> <p>ア 東京国立近代美術館      (本館)      (ア) 所蔵作品に関する調査研究      ・所蔵作品90点について音声ガイドの作成にあたっては、担当者が改めて作品の前でディスカッションを重ねるなどして新知見を導き出すとともに、安易に専門用語を用いることなくそれを表現する手法についての研究を実施      (イ) 保管・修理に関する調査研究      ・加山又造の初期作品の修復を機に、加山の実験的技法についての所見を得た      ・藤田嗣治作品をバリの日本文化会館に貸与する際に、東京芸術大学と連携して詳細な調査を行い、作品の過去の修復履歴などについての新知見を得た      (ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映      ・所蔵作品展音声ガイドを導入      ・洋画の全点点検により作品状態がより詳細に把握され、迅速な対応が可能になるなど、作品保管の質が向上      ・外部の専門家と連携し、木彫作品の展示期間、展示条件などについて、保存上の観点からのガイドラインを策定      (工芸館)      (ア) 所蔵作品に関する調査研究      ・近代工芸史を構築するに足る多岐におよぶ多くの所蔵作品に関して、その特質や位置づけ、作家の研究を実施      (イ) 保管・修理に関する調査研究      ・漆芸や染織、金工、人形等の現状保存修復を中心に、各素材分野の研究者等と提携しつつ調査研究を実施      (ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映      ・所蔵作品の公開・展示や展覧会への貸与等、当館事業の推進と近代工芸の普及・理解へ反映      (フィルムセンター)      (ア) 所蔵作品に関する調査研究      ・マキノ雅広監督に関する調査研究      ・今村昌平監督と黒木和雄監督に関する調査研究      ・川島雄三監督に関する調査研究      ・日本の映画女優（ステル写真）に関する調査研究      ・インド映画史に関する調査研究      ・ヨーロッパ映画に関する調査研究      ・日本の文化・記録映画に関する調査研究      ・1930年代アメリカ映画に関する調査研究      (イ) 保管・修理に関する調査研究      &lt;映画フィルムの保管に関する調査研究&gt;</p>	<p>A</p> <p>各館とも、所蔵作品の保存・修復に関する調査研究は、外部の専門家・専門機関との連携・協力のもとに、展示や各種の公開と連動して適切に実施されている。</p> <p>【より良い事業とするための意見】      ・法人内の資料に関する収集・保管の調査研究はむろんのこと、学芸系の研究者が、幅広い保存体制の構築に資する人となるための研究成果の充実が望ましい。</p> <p>・フィルムセンターについては、デジタルシネマの普及により、本格的なデジタルによる保管も現実的な問題となることから、それらについてのスペース、設備、フォーマットなど、視野に入れておく必要がある。また、日本にはすでに現存しない名作フィルムについても、収集調査を続けてほしい。</p>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・小型映画フィルムの適切な保管とカタログニングに関する研究</li> <li>・可燃性フィルムの適切な保管に関する研究</li> <li>・近赤外分析法によるフィルムの劣化測定に関する研究</li> <li>・多様なフィルムに対応した調査カードのフォーマットに関する研究</li> <li>&lt;映画フィルムの修理に関する調査研究&gt;</li> <li>・フィルムスキャニングにおけるフィルム素材の選択に関する研究</li> <li>・染色フィルムの復元に関する研究</li> <li>・音の復元におけるフィルム素材の選択に関する研究</li> <li>・レコード・トーキー作品における映写速度と音復元の関係に関する研究</li> <li>・シネテープの復元に関する研究</li> <li>・17.5mmフィルムの復元に関する研究</li> <li>・9.5mmフィルムの復元における適切な画郭復元に関する研究</li> <li>・映画関連資料に関しては、新たにプレス資料のカタログニングに着手し、日本の映画流通システムの中で作られてきたプレスシート・映画パンフレット・チラシ・試写状といったさまざまな形態を持つプレス資料の分類法と整理方法について研究を実施</li> <li>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</li> <li>&lt;映画フィルムの保管における反映&gt;</li> <li>・8mmフィルムや9.5mmフィルムの調査態勢の確立と、荻野茂二作品等所蔵作品のカタログニングに反映された。</li> <li>・フィルム調査カードのフォーマット変更と、データ入力効率化、データ内容の精緻化に反映された。</li> <li>&lt;映画フィルムの修理における反映&gt;</li> <li>・「なまくら刀」（1917年）、「浦島太郎」（1918年）のデジタル復元および染色復元に反映された。</li> <li>・「岩掛時次郎」（1954年）等の音復元に反映された。</li> <li>・レコード・トーキー作品「国歌 君が代」（1931年）の復元に反映された。</li> <li>・シネテープを音原版とする「アジアはひとつ」（1973年）の復元に反映された。</li> <li>・17.5mmフィルムを原版とする「赤垣源蔵」（1936年）の復元に反映された。</li> <li>・9.5mmフィルムを原版とする「文福茶釜」（1932年）等の復元に反映された。</li> </ul> <p>イ 京都国立近代美術館</p> <p>(ア) 所蔵作品に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寄贈された池田満寿夫版画約800点の基礎調査を終了し、『所蔵作品目録V・M&amp;Yコレクション 池田満寿夫の版画』としてカタログレゾネを兼ねる所蔵作品目録を刊行</li> </ul> <p>(イ) 保管・修理に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・客員研究員と共同による写真作品の再分類整理システムの構築、展示に供するためのマッピング等の作業を継続</li> <li>・寄贈された池田満寿夫版画約800点のうち、展示に供するため350点のマッピングを完了</li> <li>・遺族の手に残された麻田浩作品約200点の点検、保存に向けての洗浄、簡単な修復を実施</li> </ul> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「没後10年 麻田浩」展および「新収作品展—寄贈されたM&amp;Yコレクション 池田満寿夫の版画」展を開催。</li> </ul> <p>ウ 国立西洋美術館</p> <p>(ア) 所蔵作品に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・所蔵絵画作品、ヴァザーリ「ゲッセマネの祈り」の来歴に関する調査研究（フィレンツェ特殊美術館監督局との連携）</li> <li>・所蔵絵画作品、ゲルチーノ「ゴリアテの頭をもつダヴィデ」の来歴に関する調査研究（バルマ・ピアチェンツァ歴史美術民俗文化財監督局、フィレンツェ特殊美術館監督局との連携）</li> <li>・所蔵イタリア・ルネサンス版画に関する調査研究（チューリヒ工科大学版画素描館との連携）</li> <li>・寄託絵画作品、ムンク「坑夫たち」に関する調査研究（オスロ市立ムンク美術館との連携）</li> <li>・アレクサンドロ・ペドリ・マツォーラ「ウェヌスとアモル」の作者および来歴に関する調査研究（バルマ・ピアチェンツァ歴史美術民俗文化財局との連携）</li> <li>・ルカス・クラナハ「ゲッセマネの祈り」の図像学に関する調査研究</li> <li>・パウツ派「荊冠のキリスト」の作者および来歴に関する調査研究</li> </ul> <p>(イ) 保存・修復に関する調査研究</p> <p>&lt;保存環境整備のための調査&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・空気汚染対策：館内の空気汚染調査を継続して実施。また、館内施設の各種工事に先立って塗料・接着剤等の安全性を確認し、施工後は空気測定により有害物質を調査</li> <li>・虫害対策：年4回、館内にトラップ約120基を配置して生物調査を実施し、季節ごとの害虫の発生状況を把握し、必要に応じて清掃等を実施</li> <li>・作品貸出に伴う環境調査：貸出先美術館のファシリティレポート、図面および温湿度記録をもとに事前の環境調査を行うとともに、貸出作品および輸送箱にデータロガーを装着して貸出中の温湿度データを記録し、返却後にデータの分析を実施</li> </ul>	
--	--	--	--

		<p>&lt;保存修復に関する調査研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで修復が行われなかった所蔵作品について、X線撮影、顔料分析などの調査を実施、新しい事実が明らかになる成果を得た</li> <li>・17年度より行っている屋内彫刻の免震化推進の過程で、外部研究者の協力により、簡易式免震滑り板の加震実験を計画。その成果は国立西洋美術館で平成21年度に開催予定の国際会議で発表の予定</li> </ul> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保存・修復に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マツォーラ作品の調査結果を「バルマ イタリア美術、もう一つの都」展図録に発表</li> <li>・ルカス・クラーナハの「ゲッセマネの祈り」とヴァザーリ「ゲッセマネの祈り」の調査結果を、所蔵作品展のコーナー解説パネルにおいて発表</li> <li>・バウツ派「荊冠のキリスト」の来歴調査研究によって、市場に出ていたバウツ派の「悲しみの聖母」が「荊冠のキリスト」の対作品であることが明らかとなったため、平成19年度「悲しみの聖母」を購入</li> </ul> <p>エ 国立国際美術館</p> <p>(ア) 所蔵作品に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・メディアアートに関する収集・保管について、客員研究員として招いている研究者と検討を実施</li> </ul> <p>(イ) 保管・修理に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「開館三十周年記念展」開催にあたり、主要な作品の保管状況を調査。特に紙に関する専門家と共同で版画の保管状況を調査、いくつかの作品については、額の裏板に含まれる化学物質が紙に変色等の悪影響を及ぼす可能性があることが判明し、早急に作品の修復を行い、無害な素材の額で適切な保管をを実施</li> </ul> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・館内に害虫捕獲器を多数設置し、害虫の分布、種類を調査し、保管に活用</li> <li>・作品の保管状況の調査結果により作品毎に適切な額装を施し、長期間保存、展示及び貸出しに対応できるよう対策を実施</li> </ul>		
--	--	--	--	--

# 3. 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

評定 A

中期計画通り、または中期計画を上  
回って履行し、中期目標に向かって順  
調、または中期目標を上回るペースで  
実績を上げている。

## 評価のポイント

ナショナルセンターとして、調査研究成果の発信や国内外の美術館との連携及び協力等に努め、美術館界のモデルとなる取り組みがなされたものと認められる。  
人材育成に関しては、指導者研修及び教材等の開発の面において進展が見られるが、今後の日本における高度の美術館職員・学芸員を養成するために、法人として明確な目標を策定し、計画を定める必要がある。

中期計画の各項目	評価項目	評価基準					主な実績及び自己評価	評定	評価委員会によるコメント																																																														
		S	A	B	C	F																																																																	
(1) 所蔵作品等に関する調査研究成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関する刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。	ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力 【定性的に評価】	<b>3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与</b> <b>(1) 所蔵作品等に関する調査研究成果の発信</b> <b>① 研究紀要、学術雑誌、展覧会刊行物、学会等での発信</b> ア 館の刊行物による研究成果の発信 各館において、展覧会図録（計39冊）、研究紀要（計3冊）、館ニュース（計6種、26冊発行）、所蔵品目録（計1冊）等の刊行物により、研究成果を発信した。					A	各館とも昨年度より盛んにセミナー・シンポジウムの開催を実施し、国内外との連携・協力を努めたと認められる。また、各館とも研究水準は高く、インターネットで研究成果を公開するなど、他の館の見本となる取り組みがなされたものと考えられる。  「アジアのキュビズム」展の国際的巡回など評価に値する展覧会が実施され、一定の努力は認められるが、わが国の現代美術の多様な実態をはじめ、メディアアート、デザイン、また、いわゆるサブカルチャーに属する分野にまで視野を広げての紹介が望まれる。そして、研究紀要の刊行への取り組みなど学術的内実としてはより改善が望まれる。  【より良い事業とするための意見】 ナショナル・ミュージアムとして、各館が国際博物館会議（ICOM）に参加し、あるいは関係職員の派遣を検討するなどの積極性が望まれる。																																																															
		<table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>展覧会図録</th> <th>研究紀要</th> <th>館ニュース</th> <th>所蔵品目録</th> <th>パンフレット・ガイド等</th> <th>その他</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館本館</td> <td>5</td> <td></td> <td>6</td> <td>0</td> <td>6</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>3</td> <td>1</td> <td></td> <td>0</td> <td>3</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>0</td> <td></td> <td>6</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>10</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>4</td> <td>1</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>5</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>6</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>10</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>—</td> <td>7</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>39</td> <td>3</td> <td>26</td> <td>1</td> <td>28</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>					館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	所蔵品目録	パンフレット・ガイド等	その他	東京国立近代美術館本館	5		6	0	6	0	東京国立近代美術館工芸館	3	1		0	3	0	東京国立近代美術館フィルムセンター	0		6	0	1	0	京都国立近代美術館	10	1	1	1	0	0	国立西洋美術館	4	1	4	0	5	0	国立国際美術館	7	0	6	0	6	0	国立新美術館	10	0	3	—	7	0	計	39	3	26	1	28	0		
館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	所蔵品目録	パンフレット・ガイド等	その他																																																																	
東京国立近代美術館本館	5		6	0	6	0																																																																	
東京国立近代美術館工芸館	3	1		0	3	0																																																																	
東京国立近代美術館フィルムセンター	0		6	0	1	0																																																																	
京都国立近代美術館	10	1	1	1	0	0																																																																	
国立西洋美術館	4	1	4	0	5	0																																																																	
国立国際美術館	7	0	6	0	6	0																																																																	
国立新美術館	10	0	3	—	7	0																																																																	
計	39	3	26	1	28	0																																																																	
		注 「パンフレット・ガイド等」には、小企画展の内容や所蔵作品の解説を掲載したパンフレット、子ども向けの鑑賞ガイド等が含まれる。  イ 館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信 平成19年度業務実績報告書参照。  ウ インターネットによる調査研究成果の発信 (ア) 東京国立近代美術館 『研究紀要』第11号（2007年）より、収録論文のホームページ上への掲載を開始した。 (イ) 京都国立近代美術館 メール討論会「今なぜ麻田浩なのか」を開催したほか、コレクション・ギャラリーの小企画、テーマ展示に関する小論文を掲載展覧会ごとに掲載した。 (ウ) 国立西洋美術館 ホームページにて「国立西洋美術館年報」及び「国立西洋美術館ニュース ゼフュロス」のバックナンバーの公開を行った。蔵書目録（OPAC）を公開し、国立西洋美術館の蔵書を検索することができるサービスを提供した。また、ホームページにおいて所蔵作品の紹介文を掲載したほか、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け「国立西洋美術館所蔵作品データベース」を公開し、所蔵作品の検索や現在所蔵作品展に展示されている作品の確認を可能にするなど、所蔵作品展関連のコンテンツの充実を図った。 (エ) 国立国際美術館																																																																					

インターネットを通じ、「日経ネット関西版」、「artscape」において現代美術及び展覧会に関する研究を紹介した。

(オ) 国立新美術館

「国立新美術館ニュース」をホームページにおいて公開した。

エ その他

(ア) 東京国立近代美術館

(本館)

『読売新聞』都内版連載「近代美術の東京」により所蔵作品研究の成果を定期的に発信した。各企画展に関連する研究成果を、『毎日新聞』(観光展)、『芸術新潮』(観光展)、『新美術新聞』(観光展、「日本近代の彫刻」展、平山郁夫展、東山魁夷展)、『美術の社』(観光展)、『趣味の水墨画』(東山魁夷展)、『読売ウィークリー』(平山郁夫展)、『文化庁月報』(「わたしいまめまいしたわ」展)ほかににおいて公表した。

(工芸館)

所蔵作品研究、企画展出品作品研究の成果を、月刊誌『淡交』(淡交社)と『銀座チャイム』(和光)に発表し、研究成果の公表と同時に展覧会広報につなげた。また、この3年間続けてきたイギリス現代陶芸研究者との共同研究の成果を踏まえた論文集が『バーナード・リーチ再考—スタジオ・ボタリーと陶芸の現代』(思文閣出版)として刊行された。

(フィルムセンター)

「第63回国際フィルム・アーカイブ連盟東京会議2007」(平成19年4月)のシンポジウム「短命映画規格の保存学的研究」第2セッション「日本の場合」(4月8日)でチェアを担当(主任研究員 入江良郎)した。

「第63回国際フィルム・アーカイブ連盟東京会議2007」(平成19年4月)のシンポジウム「短命映画規格の保存学的研究」第2セッション「日本の場合」(4月8日)で「日本の再生フィルム」に関する研究発表(主任研究員 岡田秀則)を行った。

「フィルムサイズで見る映写機の変遷」監修(主任研究員 入江良郎)を行った(『大人の科学マガジン』Vol. 15 「大特集 まわれ! 映写機」(平成19年4月, 学習研究社))。

② 所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催

ア 東京国立近代美術館

(ア) パネル・ディスカッション「日本彫刻の近代」

開催日:平成19年11月8日

場所:東京国立近代美術館講堂

講師・パネリスト等:パネリスト 黒川毅弘(武蔵野美術大学彫刻科教授)、田中修二(大分大学教育福祉科学部准教授)、古田亮(東京芸術大学大学美術館准教授)、松本透(当館企画課長)、司会 大谷省吾(当館・企画課 主任研究員)

内容:日本近代彫刻の通史展開催を機に、第1部(田中・古田)では主に戦前、第2部(黒川・松本)では戦後の日本彫刻について諸種の問題点を抽出したのち、第3部では、日本における近代彫刻の成立時期・背景、および近代性の所在等について共同討議を行った。

聴講者数:73名

(イ) 「岡部嶺男と工芸の近代」

開催日:平成19年4月22日

場所:東京国立近代美術館講堂

講師:金子賢治(東京国立近代美術館工芸課長)

内容:陶芸家・岡部嶺男の仕事近代工芸史の流れにおいて位置づけ、その造形的意義を読み解く。

聴講者数:84名

(ウ) スライドレクチャー

開催日:平成19年9月2日

場所:東京国立近代美術館工芸館

講師:高橋禎彦(「所蔵作品展 現代のガラス」出品作家)

内容:初期から現在に至る自身の作風と意識の変遷を紹介し、今日のガラス造形の特性を論ずる。

聴講者数:63名

この他、工芸館で研究者と作家による講演会を各1回行った。分かりやすさ・親しみやすさに重点をおいたボランティアガイド(タッチ&トーク)によって工芸愛好者の裾野を広げる一方で、今回のような工芸の現況を概観する試みは、制作・研究の両面に対する刺激となり、活発な論議が行われたのは有意義であった。

イ 国立西洋美術館

(ア) 「Fun with Collection 2007 見る楽しみ・知る喜び—美術史・市場・修復編」

開催日:平成19年7月8日~8月19日

場所:国立西洋美術館講堂、本館・新館展示室、修復室、東京国立博物館、小山登美夫ギャラリー

講師・パネリスト等:国立西洋美術館教育普及室、高梨光正・大屋美那・河口公生(国立西洋美術館主任研究員)、馬淵明子(日本女子大学教授)、ゴウヤスノリ(ワークショップ・プランナー)、佐藤厚子(国立西洋美術館客員研究員)、畑中俊彦(クリスティーズ・ジャパン 顧

間)、瀬木慎一(総合美術研究所所長)、福富太郎(キャバレー経営者)、小山登美夫(小山登美夫ギャラリー)、藤原徹(東北芸術工科大学教授)  
 内容: 作品をじっくりと鑑賞し、知るために、美術史、美術市場、保存修復という三つの視点から作品に迫った。視点を変えることでこれまでにない新しい発見をもたらすことができた。  
 聴講者数: 550人

ウ 国立国際美術館

(ア) 講演会「コレクションの楽しみ方」

開催日: 平成20年1月26日

場所: 国立国際美術館 地下1階 講堂

講師: 鳥敦彦(国立国際美術館学芸課長)

内容: 国立国際美術館の所属作品について、海外で紹介されている実例を紹介しながら解説するとともに、コレクションの楽しみ方について、広く理解をしていただく目的で講演を行った。

聴講者数: 124人

(2) 国内外の美術館等との連携

① シンポジウム等の開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築

ア 東京国立近代美術館

(本館・工芸館)

セミナー・シンポジウム名	第3回アジア次世代美術館キュレーター会議	開催日	平成20年3月11日~13日
場所	アヤラ美術館(フィリピン・マニラ市)他 主催: アヤラ美術館・国際交流基金	聴講者数	約20人 (公開フォーラム参加人数)
講師・パネリスト等の氏名(職名)	会議参加者は5カ国(日本・韓国・中国・シンガポール・フィリピン)の12名。当館からは保坂健二朗研究員を派遣。		
セミナー・シンポジウム名	International Symposium Craft Heritage in Modern Japan	開催日	平成19年10月19~20日
場所	大英博物館講堂	聴講者数	延べ300人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	基調講演: 三代徳田八十吉(陶芸家、重要無形文化財保持者) 発表・パネリスト: 金子賢治(東京国立近代美術館工芸課長)、森口邦彦(染織家、重要無形文化財保持者)、室瀬和美(漆芸家)、エドモンド・デュ・パール(陶芸家)、ニコル・クーリジ・ルーマニエル(セインズベリー日本藝術研究所所長)ほか		

(フィルムセンター)

セミナー・シンポジウム名	第63回国際フィルム・アーカイブ連盟東京会議2007	開催日	平成19年4月7日~4月12日
場所	東京国立近代美術館フィルムセンター	聴講者数	244人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	海外から156名(36カ国、88機関)、国内から88名(招待者68名、一般参加20名)、計244名の参加者を得た。 シンポジウム「短命映画規格の保存学的研究」 基調講演: ジャン=ピエール・ヴェルシュール(シネヴォリュション) 第一セッション「さまざまな映画フィルム」: パトリック・ロックニー(ジョージ・イーストマン・ハウス) ほか 第二セッション「日本の場合」: 草原真知子(早稲田大学) ほか 第三セッション「モノの映画史」: エルキ・フータモ(カリフォルニア大学ロサンゼルス校) ほか 3D(立体)映画に関する講演と上映: シュテファン・ドレスラー(ミュンヘン映画博物館)		

イ 京都国立近代美術館

セミナー・シンポジウム名	シンポジウム ノイズレス、「聴く」ということ	開催日	平成19年4月7日
場所	京都国立近代美術館 1階講堂	聴講者数	110人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	カトリーヌ・ブルー(美学美術史、リール大学)、ロルフ・ユリウス(招聘アーティスト)、鈴木昭男(招聘アーティスト)、立命館大学仲間ゼミ学生代表(テーマ: ノイズレスへの憧憬)、藤島寛(京都国際現代音楽フォーラム企画委員、立命館大学大学院応用人間科学研究科)		

(2)-1 国内外の優れた研究者を招聘しシンポジウムを開催するなど、美術館活動に対する評価が得られるよう努めるとともに、人的ネットワークの構築を推進する。

(2)-2 海外の美術館において、我が国の優れた作家や美術作品を世界に広く紹介する展覧会が活発に行われるよう、海外の美術館との連携・協力に積極的に取り組む。

セミナー・シンポジウム名	「藝術は誰のものか？—著作権問題を芸術学から考える」	開催日	平成 19 年 6 月 16 日
場所	京都国立近代美術館 1 階講堂	聴講者数	120 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	佐々木健一(藝術学関連学会連合会長), 渡辺裕(日本音楽学会), 木村建哉(日本映像学会), 島本流(美学会), 塚田健一(東洋音楽学会)		
セミナー・シンポジウム名	「ポピュラーカルチャーおよび表現に関する研究交流推進プロジェクト」第 1 回研究会	開催日	平成 19 年 7 月 7 日
場所	京都国立近代美術館 1 階講堂	聴講者数	33 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	村田麻里子(京都精華大学人文学部社会メディア学科), ウスビ・サコ(京都精華大学人文学部文化表現学科), 岩本真一(京都精華大学人文学部社会メディア学科), 佐藤守弘(京都精華大学デザイン学部)		
セミナー・シンポジウム名	国際交流基金京都支部 2007 年度第 3 回フェローセミナー「尺八の国際的な広がりとその原点回帰の動き」	開催日	平成 19 年 9 月 15 日
場所	京都国立近代美術館 1 階講堂	聴講者数	20 名
講師・パネリスト等の氏名(職名)	Kiku Day (デイ・菊壺) (デンマーク/2006 年度基金フェロー)		
セミナー・シンポジウム名	麻田浩展シンポジウム「今、なぜ麻田 浩なのか」	開催日	平成 19 年 9 月 17 日
場所	京都国立近代美術館 1 階講堂	聴講者数	153 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	麻田弦(麻田浩長男), 森本岩雄(京都市立芸術大学名誉教授), 岩城見一(京都国立近代美術館長), 山野英嗣(京都国立近代美術館主任研究員)		
セミナー・シンポジウム名	「ドイツ・ロマン主義の『現在』—美術, 音楽, 思想から—」	開催日	平成 19 年 9 月 21 日
場所	京都国立近代美術館 1 階講堂	聴講者数	30 名
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ハンス・ディッケル(エルランゲン=ニュルンベルク大学教授), 神林恒道(立命館大学教授), 藤野一夫(神戸大学教授), 仲間裕子(立命館大学教授)		
セミナー・シンポジウム名	ギャラリー・ラボ 2007—鑑賞空間の合意に向けて「街角のミュージアム—アジア, ヨーロッパ, 北米を歩く」	開催日	平成 19 年 9 月 23 日
場所	京都国立近代美術館 1 階講堂	聴講者数	12 名
講師・パネリスト等の氏名(職名)	三木美裕(カナダ国立博物館客員学芸員)		
セミナー・シンポジウム名	細見美術館「琳派展X 神坂雪佳」アートキュープレクチャー「神坂雪佳と近代の工芸図案」	開催日	平成 19 年 11 月 24 日
場所	京都国立近代美術館 1 階講堂	聴講者数	53 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	土田真紀(帝塚山大学講師)		
セミナー・シンポジウム名	「ドクメンタ 12 を振り返って」	開催日	平成 19 年 11 月 28 日
場所	京都国立近代美術館 1 階講堂	聴講者数	64 名
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ルート・ノアック(ドクメンタ 12 キュレーター)		



セミナー・シンポジウム名	「鑑賞教育の豊かな実践に向けて—東アジアからの発信」	開催日	平成 19 年 12 月 2 日
場所	京都国立近代美術館 1 階講堂	聴講者数	30 名
講師・パネリスト等の氏名(職名)	神林恒道(立命館大学大学院教授, 日本美術教育学会会長), 萱のり子(大阪教育大学教授), 梅澤啓一(立正大学教授), 大嶋彰(滋賀大学教授), 新聞伸也(滋賀大学教授)		

ウ 国立西洋美術館

セミナー・シンポジウム名	国際シンポジウム「バルマ派美術研究の現在」	開催日	平成 19 年 8 月 10 日
場所	国立西洋美術館 講堂	聴講者数	53 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	メアリー・ヴァッカーロ(テキサス大学准教授), パベット・ポーン(テキサスクリスト教大学教授), 高梨光正(国立西洋美術館主任研究員)		
セミナー・シンポジウム名	国際シンポジウム「ルネサンスのエロティック美術—画像と機能—」	開催日	平成 20 年 3 月 29 日
場所	国立西洋美術館 講堂	聴講者数	141 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	渡辺晋輔(国立西洋美術館研究員), ジョナサン・K・ネルソン(シラキュース大学フィレンツェ校), アウグスト・ジェンティーリ(ヴェネツィア, カ・フォスカリ大学), 高梨光正(国立西洋美術館主任研究員), 池上英洋(恵泉女学園大学), ペット・タルヴァッキア(コネチカット大学), マルツィア・ファイエット(ウフィツィ美術館版画素描室長), 細野喜代(慶應義塾大学大学院), 越川倫明(東京芸術大学)		

エ 国立国際美術館

セミナー・シンポジウム名	国立国際美術館開館三十周年記念シンポジウム「未完の過去—この30年の美術—」	開催日	平成 19 年 11 月 3 日～4 日
場所	国立国際美術館 講堂	聴講者数	830 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会, 講師等 原 久子(アートプロデューサー・ライター) 後小路 雅弘(九州大学大学院人文科学研究教授), 松井みどり(美術評論家), 南條史生(森美術館長), 岡田温司(美術史家, 京都大学大学院教授), ナウイン・ラウンチャイクン(アーティスト), 松井みどり(美術評論家), 五十嵐太郎(東北大学大学院准教授), 浅田 彰(評論家), 高階秀爾(美術史家, 美術評論家), 石内 都(写真家), 吉岡 洋(京都大学教授), 南條史生(森美術館長), 住友文彦(東京都現代美術館学芸員), 岡田温司(美術史家, 京都大学大学院教授) 岡崎乾二郎(造形作家), 田中 純(東京大学大学院総合文化研究科准教授) ほか		

オ 国立新美術館

セミナー・シンポジウム名	モネとその遺産	開催日	平成 19 年 5 月 12 日
場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数	110 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	宮崎克己(美術史家), 六人部昭典(実践女子大学), 松岡智子(倉敷芸術科学大学), 天野知香(お茶の水女子大学), 馬淵明子(日本女子大学), 南雄介(国立新美術館主任研究員), 松本陽子(画家), 高階秀爾(大原美術館)		
セミナー・シンポジウム名	アート・ドキュメンテーション学会 2007 年度年次大会	開催日	平成 19 年 6 月 23 日, 24 日
場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数	229 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	安斎利洋(システムアーティスト), 前田富士男(慶應義塾大学), 丸川雄三(国立情報学研究所), 金子郁容(慶應義塾大学), 水谷長志(独立行政法人国立美術館)		

セミナー・シンポジウム名	日本色彩学会 第38回全国大会	開催日	平成19年5月18日～20日
場所	国立新美術館 3階講堂	聴講者数	475人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	河本哲三(元ロレアルアーツアンドサイエンスファンデーション代表)、名取和幸((財)日本色彩研究所)、鈴木卓治(国立歴史民族博物館)、松田陽子(Colour Institute MeMe/ミーム)		
セミナー・シンポジウム名	日本色彩学会「脳のなかのマチエール」	開催日	平成19年10月21日
場所	国立新美術館 3階講堂	聴講者数	90人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	本吉勇(NITコミュニケーション科学基礎研究所研究主任、東京工業大学大学院准教授)		

**② 我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力**

**ア 東京国立近代美術館**

(本館)

東京国立近代美術館・韓国国立現代美術館・シンガポール美術館・国際交流基金の共催で3カ国の国立美術館で開かれた「アジアのキュビズム」展(平成17年8月～平成18年4月)を再編成した展覧会が、パリ日本文化会館(平成19年5月16日～7月7日)で開催され、支援館として展覧会の企画・構成、作家・作品選定、展示等を協同して行った。

(工芸館)

大英博物館「わざの美：伝統工芸の50年」展(主催：大英博物館、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、日本工芸会、国際交流基金、協力：文化庁、平成19年7月19日～10月21日)開催にあたり、日本側主催者代表として連絡・調整と運営を担った。また、図録作成やデモンストレーション等関連事業開催への協力を行った。工芸館は、出品作品112点のうち半数を貸し出した。

(フィルムセンター)

ルーヴル美術館講堂(フランス・パリ、FIAF寄附機関)との共同主催により、在仏日本人作曲家・望月京氏の作曲、アンサンブル・コントラクションの演奏を付した「無声映画をコンサートで『瀧の白糸』上映会」開催した(平成19年6月15日～17日)。

シネマテーク・ケベコワーズ(カナダ・モントリオール)において、「アニメの源へー日本のアニメーション映画(1924～1952)」がフィルムセンターとの共同主催により開催(平成20年2月27日～4月5日)され、フィルムセンター研究員が番組編成と作品選定を行ったほか、解説等の寄稿、講演、作品紹介等を行った。

無声映画期の日本の女優を扱った「ステル写真でみる日本の映画女優」展の一部についてドイツのエアランゲン無声映画音楽祭への出品を要請され、フィルムセンターとの共催企画として現地での展覧会の開催につながった(平成20年1月24日～2月29日)。

**(3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換**

**ア 東京国立近代美術館**

工芸館では、漆芸作品の調査研究をMOA美術館や目白漆芸文化財研究所と、伝統工芸作品の調査研究を大英博物館、セインズベリー日本藝術研究所と行った。

フィルムセンターでは、フィルムアルヒーフ・オーストリアとの契約に基づき、『キリストの一生』(1923年)最長版復元への調査協力とフィルム貸与を行ったほか、京都府京都文化博物館によりデジタル復元された『祇園小唄 絵日傘 狸大尽』(1930年)『槍供養』(1927年)について、プリント作成に関する情報交換を行った。

**イ 京都国立近代美術館**

写真の保存整理の専門家である客員研究員を中心に、写真作品保存・整理・公開システムの再構築を行った。

**ウ 国立西洋美術館**

ゲティ美術館の国際プロジェクトである国際会議「博物館の地震対策」の一環として、トルコのイスタンブールのキラク財団・ペラ博物館において開催されたシンポジウムで「ロダン作品《地獄の門》の免震化」と題して講演を行った。

10月にはテート(ロンドン)の招待により、テート・モダンで開催されたワークショップ(国際シンポジウム)「近代彫刻におけるレプリカとその意味」の討論に参加した。

**(4) 所蔵作品の貸与等**

**① 作品の貸与**

(3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等と保存・修復に関する情報交換を図りながら、修復・保存活動の充実を図る。

(4) 所蔵作品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これらに類する施設等に

し、貸与等を積極的に行う。

館名	貸出件数	貸出点数	特別観覧件数	特別観覧点数
東京国立近代美術館(本館)	77	366	156	512
東京国立近代美術館(工芸館)	28	160	23	53
京都市立近代美術館	70	343	66	120
国立西洋美術館	8	11	59	213
国立国際美術館	25	104	12	24
計	208	984	316	922

東京国立近代美術館本館では、写真観覧制度（プリントスタディ）を行った。利用件数18件、閲覧者数153人、閲覧作品数575点と平成18年度（利用件数10件、閲覧者数27人、閲覧作品点数482点）を大きく上回った。また、工芸館では、毎年の文化庁企画巡回展「わざと美」展をはじめ、練馬区立美術館や茨城県陶芸美術館等美術館の企画展、NHKプロモーション企画巡回展等への特別の貸出協力があった。

京都国立近代美術館では、作品の保存に支障がない範囲で可能な限り貸出依頼に対応し、地方美術館の活動や学芸職員の研鑽に協力した。

国立西洋美術館では、国立美術館巡回展（姫路市立美術館、松本市美術館）にはクロード・ロラン、ドラクロワ、ゴッホ、ロダン、マイヨール等の重要作品を含む絵画21点・彫刻10点・版画62点を出品した。

②映画フィルム等の貸与

種別	貸出		特別映写観覧		複製利用	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数
映画フィルム	64	276	110	262	31	64

種別	貸出		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数
映画資料	3	21	50	188

海外への貸与では、シネマテーク・フランセーズ、フィンランド・フィルム・アーカイブ、ソウル忠武路国際映画祭、北アメリカ及びイギリスを巡回した内田吐夢監督回顧展、国内への貸与では、プラネット映画資料図書館（大阪）、山形国際ドキュメンタリー映画祭、高知県立美術館などを巡回した川島雄三監督回顧展等、各機関や映画祭、巡回展等に対し多数の映画フィルムを貸与した。

平成19年度の貸与本数は昨年度より一段と増加した。大規模な上映企画への貢献、巡回展への協力、国内における所蔵作品の継続的な上映拠点の形成への寄与は、平成19年度の大きな特徴となった。

- (5)-1 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、全国の小・中学校等や公立美術館における教育普及活動の充実に資するため、先導的・先駆的な教材やプログラムの開発を行う。
- (5)-2 全国の小・中学校等における鑑賞教育や、全国の美術館における教育普及活動の活性化を図るため、指標にあたる人材の育成を目指した全国レベルの教員、学芸員等の研修を実施する。

ナショナルセンターとしての人材育成  
【定性外に評価】

(5) 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとしての活動

① 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施

「平成19年度美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を実施した（参加者数：139名、実施期間：平成19年8月6日～8月8日、会場：東京国立近代美術館及び国立新美術館）。平成19年度は、全都道府県及び政令指定都市から参加者があった。また、指導者研修の報告書を作成し、関係者に配布するとともにホームページへの掲載を行い、研修成果の普及を図った。

② 先駆的・実験的な教材やプログラムの開発

ア 国立美術館

小・中学校の授業で利用できる美術作品鑑賞補助教材（解説シート、作品画像（DVD）、ティーチャーズガイドなど）のパイロット版を制作し、関係者に配布した。また、東京国立近代美術館（本館・工芸館）、京都国立近代美術館、国立西洋美術館及び国立国際美術館の所蔵作品65点による鑑賞教材（アートカード）を制作した。

イ 東京国立近代美術館

本館では、科学研究費補助金による大学等との共同研究で鑑賞プログラムを実施し、その記録や検証を記載した科研費報告書を「指導者研修」で配布することにより、先駆的なプログラムを全国に発信した。

また、東京都や荒川区、足立区など公立小・中学校の教員研修を実施、所蔵作品展や「東山魁夷」展の小・中学生向けセルフガイドを制作し、鑑賞授業に活用できるよう学校に配布した。

工芸館では、夏季の所蔵作品展に際して、小・中学生を対象とした鑑賞補助教材「6つの謎」「報告カード」及び教育者向け指導案を作成し、小・中学校への送付並びに館内での配布を行った。学校・クラス単位での利用希望も多く、九段中等教育学校の夏休み課題（3年生対象）として活用された。また、小学4年生～中学3年生を対象として布染技法による絵付けを行い（講師：陶芸家・上瀧勝治氏）、装飾の効

B

指導者研修及び教材・プログラムの開発については、昨年よりやや進展がみられる。また、インターンシップも定着し、展覧会における他館との共同開催を通じて、人材育成に努めていると見受けられる。しかし、学芸員制度、鑑賞教育者育成、コンピュータリテラシー、人的ネットワークなど、課題も多く、今後の日本における高度な美術館職員・学芸員を養成するためには、法人として明確な目標を策定し、計画を定め、曖昧な評価の指標を改善する必要があると考える。

【より良い事業とするための意見】  
法人として、美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修や人的ネットワーク作りには意欲的取り組みとともに、各館あるいは法人全体として人材育成のプログラムの検討を期待する。

・フィルムセンターにおいても、大学院生、海外からの奨学生などの研究者に対する割引等の制度が整備されると、より有効である。

果とそれを実現するための素材・技法の特性について学習した。実技の前後に作品鑑賞も実施し、各段階における子どもたちの関心や理解の様子を記録、検証した。

ウ 京都国立近代美術館

多様な鑑賞手法を研究するため「ギャラリー・ラボ2007」を開催した。期間を限り、コレクション・ギャラリーで「鑑賞のための会話を積極的に認める」、「子供連れの成人を無料にする」という設定を行い、館外のグループ、研究者たちが発案したプランにより様々な鑑賞実験と調査を実施し、大きな成果をあげた。また、美術家による、託児機能を備えた作品「プレイルーム」を設置、美術館に幼児を受け入れるための実験的な試みを行った。

エ 国立西洋美術館

--	--

--	--

<p>(エ) 国立国際美術館 「ベルギー王立美術館展」, 「ロシア皇帝の至宝展」及び「エミリー・ウングワレー展」では、国内の美術館のほか、海外のベルギー王立美術館、クレムリン博物館、オーストラリア国立博物館の学芸員との長期にわたる共同研究を続け、作品のみならず、その国の時代背景、作家に関する理解を深めたとともに、人的ネットワークが形成され、展覧会及び図録の充実につながった。</p> <p>(オ) 国立新美術館 ボンビドー・センター、オルセー美術館、ロサンゼルス現代美術館、アムステルダム国立美術館等との連携で展覧会を開催し、海外の美術館との人的ネットワークを構築できた。特に「スキントポーズー1980年代以降の建築とファッション」展では新たな表現分野、方法の研究につながった。また、国内においては宮城県美術館・広島県立美術館・富山県立近代美術館との連携協力により「日展100年」展を開催するなど、人的交流、共同企画を推進した。</p> <p>② キュレーター研修</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>受入人数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>5</td> </tr> </tbody> </table>	館名	受入人数	東京国立近代美術館	2	国立国際美術館	2	国立新美術館	1	計	5	
館名	受入人数										
東京国立近代美術館	2										
国立国際美術館	2										
国立新美術館	1										
計	5										

<p>(8)-1 フィルムセンターは我が国の映画文化振興の中核的機関として、国際フィルム・アーカイブ連盟（FIAF）の正会員として、引き続き国際的な事業等に取組む。また、「日本映画情報システム」の運営に主体的に関わり、所蔵映画フィルム検索システムを拡充する等、各種情報の収集・発信を行う。さらに、映画関係団体や大学等が行う各種研修について連携・調整の役割を積極的に果たすため、当該団体等との連絡会議を年2～3回開催し主導する。</p> <p>(8)-2 フィルムセンターが、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、東京国立近代美術館の映画部門から、同館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館等とならぶ独立した一館となることを模索する。</p>	<p>フィルムセンターの取組状況 【定性的に評価】</p>
--	-----------------------------------

--	--

<p>(8) 我が国の映画文化振興の中核的機関としてのフィルムセンターの活動</p> <p>① 国際フィルム・アーカイブ連盟（FIAF）の正会員としての活動 国際フィルム・アーカイブ連盟（FIAF）との共同主催により、平成19年4月7日より12日まで、第63回国際フィルム・アーカイブ連盟東京会議2007を開催し、海外から156名（36カ国、88機関）、国内から88名（招待者68名、一般参加20名）、計244名の参加者を得た。 4月7日～8日は、「短命映画規格の保存学的研究」と題したシンポジウムを行い、100年以上の歴史を持つ映画史において、創意・開発されながらも短命に終わってしまったさまざまなフォーマットについて、アーカイブの立場からその保存・復元・カタログングなどの問題について、日本人研究者を含む専門家たちによる講演、実演、ディスカッションを行った。 4月9日の午前には、「セカンド・センチュリー・フォーラム」と称するシンポジウムを行い、「フェアユースとアクセスに関するFIAF宣言に向けて」というテーマで、アジアにおける映画著作権についての講演、およびヨーロッパにおける業界団体とシネマテーク協会との合意モデルの紹介、また次回のパリ会議で本格的な討議を行うFIAF宣言に関する紹介が行われた。 午後は、FIAF各委員会の主催によるワークショップにより、フィルム・アーカイブの運営、ウェブを利用したカタログングの方法、映画保存におけるデジタル技術の新たな活用などについて、さまざまな講演が行われた。 4月10日は、海外からの参加者による富士フィルム神奈川工場足柄サイトの見学とフィルムセンター相模原分館訪問を実施し、分館では復元作品の上映会も開催した。4月11日～4月12日は、FIAF加盟機関のみによる総会により、活動報告、会長など役員を選出などを行った。 このほか、4月7日には、「テクニカル・デブリリーフィング」と題し、フィルムとデジタルの最新技術に関する講演と質疑応答を実施。4月8日には、朝日新聞社との共催により、有楽町朝日ホールにおいて、映画保存に関する座談会に引き続き、『狂った一頁』（1926年、衣笠貞之助監督）復元版のピアノ伴奏付上映を行った。また、4月7日、9日、10日、11日には、フィルムセンターおよび国内の同種機関や大学、映画保存団体による最新の復元成果を、各団体のアーキビストによる紹介とともに発表する上映会を開催した。4月7日、9日には、上映会に引き続き、シンポジウムのテーマに関連して、立体（3D）映画についての講演と上映を行った。 その他、FIAFとチネテカ・ディ・ボローニャ、イマジネ・リトロヴァータの主催する映画フィルムの復元に関するサマースクールへ研究員を派遣し、復元における技術や倫理上の課題について最新の知見を得るとともに、現像所における実作業を体験し、その成果を「NFCニューズレター」において報告した。</p> <p>② 日本映画情報システムの運営 「日本映画情報システム」については、運営管理等に関する会議への出席並びに資料の提供を行うなどの協力を行い、平成19年度に戦後に公開された劇映画（映倫審査作品）16、876本の入力完了、公開された。これにより公開レコード数は約20,000件となった。</p> <p>③ 所蔵映画フィルム検索システムの拡充 「所蔵映画フィルム検索システム」については、平成19年度中に日本劇映画のレコード128件を新たに公開した。</p> <p>④ 映画関係団体等との連携 ア 国内外で実施される各種映画祭や大学等の映画・映像に関する研究会等に協力したほか、映画関係団体や大学等との連携協力を推進するための会議等を以下のとおり主催した。 (ア)「日本映画の海外普及に関する関係諸団体との会合」（平成20年3月27日）</p>	<p>A</p> <p>我が国の映画文化振興の中核機関としての役割を十分に果たしている。 特に、フィルム・アーカイブ、鑑賞機会の提供、研究調査の面で優秀な活動を展開し、確実に成果があがっていると考えられる。</p> <p>【より良い事業とするための意見】 ・フィルムセンターがより機動的かつ柔軟な運営を行うために、国立美術館と並列の独立した機関として機能する方向を、具体的に検討すべき時期にあると考える。 ・海外のフィルムに関する機関が、映画祭、監督人材の育成などを手がけている現状をふまえ、日本のナショナルセンターとして具体的なプログラムを提示すべき時期にきている。</p>
---	--

		<p>(イ)「全国コミュニティシネマ会議2007」  実施期間：平成19年8月31日(金)、9月1日(土)(2日間)  主催：東京国立近代美術館フィルムセンター、コミュニティシネマ支援センター、財団法人国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)  内容：映画祭関係者や公共施設の上映担当者、自主上映団体、ミニシアターの関係者を集め研究討議、情報交換を行う「全国コミュニティシネマ会議」を、初めてフィルムセンターで開催した。「批評の復権」や「上映システムの再構築」などをテーマに、「多様な作品と多様な観客が作り出す豊かな映画環境」を構築するための討議が行われた。参加者は同会議において最も多い286人を記録した。</p> <p>イ 大学・専門学校等外部機関との連携による、フィルム上映を伴う映画史・映画芸術講座等を開催するとともに、映画の保存等に関する専門家養成講座の開催について検討を進めた。  (ア) F I A F 会議において、映画保存復元等に関する上映を伴う講座を開催した。  (イ) F I A F が主催する映画フィルムの保存に関するサマースクールへ映画室研究員を派遣し、N F C ニューズレターにおいて報告を行った。</p> <p>ウ 文化庁が実施する優秀映画賞選考会に協力したほか、文化庁との共同事業により「近代歴史資料緊急調査(映像フィルム・映画関係分野)」を実施し、昭和30年頃までに製作された映画フィルムおよび関連資料の網羅的な所在調査を実施し、今後の収集・保存にとって有効な情報を得ることができた。</p> <p>⑤ <b>フィルムセンターの東京国立近代美術館からの独立の検討</b>  東京国立近代美術館フィルムセンターでは、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、国立美術館内における独立した一館となるべく、その機能拡充について内部検討会等において検討を行い、その内容を基に関係資料の整備を行った。</p> <p>※1 S : 特ご優れた実績を上げている。(客観的基準は事前設けず、法人の業務の特色に応じて評定を付す。)  ※2 F : 評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。(客観的基準は事前設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評定を付す。)</p>								
	連絡会議の開催状況	<table border="1"> <tr> <td>※1</td> <td>2回以上</td> <td>-</td> <td>1回</td> <td>※2</td> <td>実績：2回 (前年度実績：5回)</td> </tr> </table>	※1	2回以上	-	1回	※2	実績：2回 (前年度実績：5回)	A	
※1	2回以上	-	1回	※2	実績：2回 (前年度実績：5回)					

## II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

<p>評定 <u>A</u></p>	<p style="text-align: center;">評価のポイント</p> <p style="text-align: center;">適切に実施され、全体的におおむね良好な実績をあげたものと認められる。</p>
<p>中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。</p>	

中期計画の各項目	評価項目	評価基準					主な実績及び自己評価	評定	評価委員会によるコメント																																																																				
		S	A	B	C	F																																																																							
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充當して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規追加される業務、拡充業務分等を除き5年期間中に一般管理費15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を図る。</p> <p>具体的な下記措置を講ずる。</p> <p>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2) 使用資源の削減</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・省エネルギー（5年計画中1年1.03%の減少）</li> <li>・廃棄物減量化（排出量を5年期間中5%減少）</li> <li>・リサイクルの推進</li> </ul> <p>(3) 施設有効利用の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・美術館施設の活用推進</li> </ul> <p>(4) 民間委託の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間開放をさらに推進していく。</li> <li>・館の広報・普及業務について民間委託を推進する。</li> </ul> <p>(5) 競争入札の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・契約業者の競争を一層推進することにより、経費の効率化を図る。</li> </ul>	<p>業務の効率化の状況 【定性的に評価】</p>	<p><b>II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置</b></p> <p><b>1 業務の効率化のための取り組み</b></p> <p><b>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化</b></p> <p>国立美術館は、平成13年4月の独立行政法人発足以来、すでに6年が経過し、文部科学省独立行政法人評価委員会による、第1期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価において、法人として一体的な運営を一層促進するよう求められていること、また、近時の独立行政法人見直しや、民間競争入札の導入など、国立美術館を取り巻く状況は極めて厳しいものとなっている。</p> <p>このような状況を踏まえ、法人としての一体的な運営を一層促進するため、本部に事務局長を置き、本部事務局の企画立案機能の強化を図るとともに、事務局長のトップマネジメントの下、各館の事務組織が有機的に連携し、効果的・効率的に業務を遂行しうる体制を整備した。</p> <p><b>(2) 使用資源の削減</b></p> <p><b>① 省エネルギー（5年計画中1年に1.03%の減少）</b></p> <p>● 使用量、使用料金の削減割合（対前年度比）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">館名</th> <th colspan="3">使用量</th> <th colspan="3">使用料金</th> </tr> <tr> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館本館</td> <td>96.0%</td> <td>93.0%</td> <td>94.0%</td> <td>99.6%</td> <td>97.7%</td> <td>98.9%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>94.2%</td> <td>-</td> <td>94.2%</td> <td>93.5%</td> <td>-</td> <td>93.5%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>118.8%</td> <td>-</td> <td>118.8%</td> <td>111.5%</td> <td>-</td> <td>111.5%</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>92.0%</td> <td>79.7%</td> <td>85.3%</td> <td>93.8%</td> <td>87.2%</td> <td>92.2%</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>88.0%</td> <td>94.7%</td> <td>92.0%</td> <td>93.9%</td> <td>99.6%</td> <td>95.8%</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>113.7%</td> <td>-</td> <td>113.7%</td> <td>100.2%</td> <td>-</td> <td>100.2%</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>法人全体</td> <td>99.4%</td> <td>92.6%</td> <td>96.0%</td> <td>98.9%</td> <td>97.7%</td> <td>98.6%</td> </tr> </tbody> </table> <p>・ 東京国立近代美術館工芸館・フィルムセンター及び国立国際美術館は、ガス設備を設置していない。</p> <p>・ 使用量の合計は、電気1kwhあたり3.6MJ、ガス1㎡あたり44.8MJ（資源エネルギー庁「エネルギー源別標準発熱量表」による。）に換算して合計したものである。</p> <p>● 特記事項（増減の理由等）</p> <p>省エネルギーについては、照明器具の省エネルギー化、空調設定温度の変更（美術作品のない区画について、夏季28℃、冬季20℃）、自動運転に対して天候等の状況に応じた手動運転の実施、使用していない設備機器類の停止及び職員に対する啓発により、使用エネルギーの削減に努めた。しかし、電気は東京国立近代美術館フィルムセンターでは上映回数が増加したこと、国立国際美術館では夏季の観客数増加に伴い空調設備の稼働率が増加したことによりそれぞれ使用量および使用料金が増加した。なお、国立新美術館については、通年度の閉館が平成19年度からであるため、対前年度比削減割合を記載していない。</p> <p><b>② 廃棄物減量化（排出量を5年期間中5%減少）</b></p> <p>● 排出量、廃棄料金の削減割合（対前年度比）</p>					館名	使用量			使用料金			電気	ガス	合計	電気	ガス	合計	東京国立近代美術館本館	96.0%	93.0%	94.0%	99.6%	97.7%	98.9%	東京国立近代美術館工芸館	94.2%	-	94.2%	93.5%	-	93.5%	東京国立近代美術館フィルムセンター	118.8%	-	118.8%	111.5%	-	111.5%	京都国立近代美術館	92.0%	79.7%	85.3%	93.8%	87.2%	92.2%	国立西洋美術館	88.0%	94.7%	92.0%	93.9%	99.6%	95.8%	国立国際美術館	113.7%	-	113.7%	100.2%	-	100.2%	国立新美術館	-	-	-	-	-	-	法人全体	99.4%	92.6%	96.0%	98.9%	97.7%	98.6%	<p style="text-align: center;">A</p>	<p>全体的に一定の努力は認められるが、入館者の増加と必要経費との関係についてあいまいである。</p> <p>施設の貸出については、ホームページに利用案内を掲載するなどの取り組みは認められるものの、本来業務に支障のない限りにおいて、より一層の利用推進が期待される。</p> <p>人件費の削減への取り組みについては、厳しい状況下において、工夫して努めているものと認められる。</p> <p>【一般競争入札の導入及び契約の見直し等の実施状況】</p> <p>業務の効率化や契約の見直しを実施するとともに、平成19年度からは随意契約基準を国の基準と同額に引き下げるなど一般競争入札を推進しているものと認められるが、美術品購入のような入札の効果が反映できない内容である場合、随意契約はやむを得ないと思われる。</p> <p>【官民競争入札の導入及び外部委託に係る検討・取組状況】</p> <p>展示事業の企画等を除く美術館の管理運営業務にかかる市場化テストの導入が着実に検討されているものと認められ、今後、適切に実施されることが望まれる。</p> <p>【より良い事業とするための意見】</p> <p>業務運営の効果的な効率化を推進するためには、対象案件を明確にし、一般競争入札の導入によって、どのような成果があったか、あるいは反対に新たな課題が生じたかなどを明らかにすべきである。また、中期的な工程表を作成することが有効である。</p>
館名	使用量			使用料金																																																																									
	電気	ガス	合計	電気	ガス	合計																																																																							
東京国立近代美術館本館	96.0%	93.0%	94.0%	99.6%	97.7%	98.9%																																																																							
東京国立近代美術館工芸館	94.2%	-	94.2%	93.5%	-	93.5%																																																																							
東京国立近代美術館フィルムセンター	118.8%	-	118.8%	111.5%	-	111.5%																																																																							
京都国立近代美術館	92.0%	79.7%	85.3%	93.8%	87.2%	92.2%																																																																							
国立西洋美術館	88.0%	94.7%	92.0%	93.9%	99.6%	95.8%																																																																							
国立国際美術館	113.7%	-	113.7%	100.2%	-	100.2%																																																																							
国立新美術館	-	-	-	-	-	-																																																																							
法人全体	99.4%	92.6%	96.0%	98.9%	97.7%	98.6%																																																																							
<p>2 外部有識者も含めた事業評価を年1回以上実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p>																																																																													
<p>3 国立美術館の管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。</p>																																																																													
<p>4 「行政改革の重要方針」（平成17年12月24日閣議決定）</p>																																																																													

議決定)を踏まえ、人件費については、平成22年度において、平成17年度と比較して、5%以上削減する。ただし、今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分については削減対象より除く。また、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額とし、退職金、福利厚生費は含まない。また、民間資金との地域差、給与カーブのフラット化、勤労者への給与への反映を内容とする国家公務員の給与構造改革を踏まえて、給与体系の見直しに取り組む。

館名	排出量			廃棄料金	
	一般廃棄物	産業廃棄物	合計	一般廃棄物	産業廃棄物
東京国立近代美術館本館	115.9%	121.5%	117.4%	115.9%	121.5%
東京国立近代美術館工芸館	77.3%	133.8%	88.0%	77.3%	133.9%
東京国立近代美術館フィルムセンター	98.5%	30.9%	44.9%	98.5%	33.7%
京都国立近代美術館	87.4%	-	87.4%	-	-
国立西洋美術館	121.3%	98.3%	113.6%	64.4%	59.0%
国立国際美術館	94.1%	-	94.1%	100.0%	-
国立新美術館	-	-	-	-	-
法人全体	100.5%	65.0%	89.8%	91.0%	69.2%

・ 京都国立近代美術館は、一般廃棄物の処理を清掃業者に一括して委託しており、廃棄料金を算出できない。  
 ● 特記事項(増減の理由等)

館内LANによる通知文書の発信及びサーバ保存文書の共同利用によるペーパーレス化に取り組むとともに、古紙の分別回収を進めることにより、廃棄物の削減を図った。国立西洋美術館では、近隣の東京国立博物館、東京藝術大学との共同による廃棄物処理業務委託により、廃棄料金の削減を図った。しかし、一般廃棄物は東京国立近代美術館本館の来館者の排出による自然増ならびに国立西洋美術館の入館者数増により、産業廃棄物は東京国立近代美術館本館ならびに工芸館の倉庫整理によりそれぞれ排出量および廃棄料金が増加した。なお、国立新美術館については、通年での開館が平成19年度からであるため、対前年度比削減割合を記載していない。

③ リサイクルの推進

古紙の再利用、廃棄物の分別、OA機器等トナーカートリッジのリサイクルによる再生使用を引き続き行い、更なるリサイクルの推進に努めた

(3) 美術館施設の利用推進

外部への施設の貸出

各館の貸出施設名	貸出日数	貸出可能日数	貸出利用率
東京国立近代美術館本館(講堂)	24日	336日	7.1%
東近美フィルムセンター(小ホール)	13日	179日	7.3%
東近美フィルムセンター(会議室)	31日	256日	12.1%
京都国立近代美術館(講堂)	16日	216日	7.4%
国立西洋美術館(講堂)	23日	296日	7.8%
国立西洋美術館(会議室)	10日	355日	2.8%
国立国際美術館(講堂)	53日	280日	18.9%
国立国際美術館(会議室)	13日	218日	6.0%
国立新美術館(講堂)	65日	173日	37.6%
国立新美術館(研修室A)	55日	174日	31.6%
国立新美術館(研修室B)	50日	179日	27.9%
国立新美術館(研修室C)	40日	188日	21.3%
計	393日	2,850日	13.8%

・ 貸出可能日数は、年末年始休館及び館事業により使用した日数を除いたもの。

● 特記事項

講堂及び会議室について、館の事業に差し支えない範囲で、外部への貸出を行った。講堂については、利用促進を図るため、館のホームページに利用案内を掲載するとともに、各種団体を訪問して講堂の設備や貸出料金等の説明を行うなどのきめ細やかな対応をした。また、フィルムセンターの小ホールについても、可能な限り外部への貸出を行った。

その他、展示室及びロビーにおいて、コンサート等イベントの開催や一般企業のプレス発表を行った。

(4) 民間委託の推進

① 一般管理部門を含めた組織・業務の見直しと民間委託の推進

次の外部委託を行い業務の効率化を図った。  
 (ア) 会場管理業務、(イ) 設備管理業務、(ウ) 清掃業務、(エ) 保安警備業務、(オ) 機械警備業務、(カ) 収入金等集配業務、(キ) レストラン運営業務、(ク) アートライブラリ運営業務、(ケ) ミュージアムショップ運営業務、(コ) 美術情報システム等運営支援業務、(サ) ホームページサーバ運用管理業務(シ) 電話交換業務

東京国立近代美術館は、個別に委託していた本館・工芸館とフィルムセンターの会場管理業務について、平成19年度から一本化したことにより、管理業務の軽減を図った。  
 国立西洋美術館は、電話交換業務の委託について平成19年度から実施した。



国立新美術館は、施設管理関係業務（設備管理、保安警備、会場管理業務）を包括的に委託することにより、施設・警備等に係る連絡調整の指示系統の一元化を行い、業務の効率化とともに管理事務の軽減を図った。公募展関係については、バックヤードの管理業務をサポートする業者に対し、トラックの入出管理・展示作業・備品管理等の業務委託を実施した。

なお、官民競争入札の導入に係る検討・取組状況については、「独立行政法人整理合理化計画（平成19年12月24日、閣議決定）」、（別表）「各独立行政法人について講ずべき措置」中の「【民間競争入札の適用】○東京国立近代美術館等の管理・運営業務（展示事業の企画等を除く。）について、民間競争入札を実施する。」のとおり、市場化テストの導入の検討を開始した。

## ② 広報・普及業務の民間委託の推進

（ア）情報案内業務、（イ）広報物等発送業務、（ウ）交通広告等掲載、（エ）ホームページ改訂・更新業務、（オ）インターネット検索サイト、（カ）ラジオCM等を利用した総合的な広報宣伝業務、（キ）雑誌「びあ」広告掲載年間契約及びチケット販売委託、（ク）講堂音響設備オペレーティング委託を行った。

## (5) 競争入札の推進

### ① 一般競争入札の実績

別紙1「契約件数及び契約金額の状況（平成19年度）」、別紙2「随意契約見直し契約に関する進捗状況」ならびに別紙3「公益調達適正化（財計第2017号）等に即した実施状況」を参照。

### ●特記事項

平成19年度から随意契約基準額を国の基準と同額に引き下げるにより、一般競争入札の推進を図った。

国立西洋美術館は、近隣の東京国立博物館・東京藝術大学との連携によるコピー用紙、トイレトペーパーおよび廃棄物処理業務委託の共同契約を実施した。

## 2 事業評価及び職員の研修等

### ① 外部有識者による事業評価

#### ア 本部

独立行政法人国立美術館運営委員会を2回（平成19年6月27日及び平成20年3月12日）開催し、平成18年度事業実績について説明聴取の上、意見交換を行った。また、平成19年度事業の実施状況及び20年度事業計画（案）について説明聴取の上、意見交換を行った。

また、独立行政法人国立美術館外部評価委員会を3回（平成19年4月24日、5月30日及び6月20日）開催し、平成18年度事業実績について説明聴取の上、審議し評価報告書を取りまとめた。

#### イ 東京国立近代美術館

評議員会（美術・工芸部会）を2回（平成19年7月13日及び平成20年3月7日）開催し、平成18年度事業実績、平成19年度事業の実施状況及び平成20年度事業計画（案）について説明聴取の上、意見交換を行った。

また、評議員会（映画部会）を2回（平成19年7月6日及び平成20年2月28日）開催し、平成18年度事業実績、平成19年度事業経過報告及び平成20年度事業計画（案）について説明聴取の上、意見交換を行った。

#### ウ 京都国立近代美術館

評議員会を1回（平成19年7月13日）開催し、平成18年度事業実績、平成19年度年度計画及び予算について説明聴取の上、意見交換を行った。

#### エ 国立西洋美術館

評議員会を1回（平成19年7月23日）開催し、平成18年度事業報告及び平成19年度事業計画について説明聴取の上、意見交換を行った。

#### オ 国立国際美術館

評議員会を1回（平成20年3月10日）開催し、平成18年度事業の外部評価結果、平成19年度事業の実施状況及び平成20年度事業計画について説明聴取の上、意見交換を行った。

#### カ 国立新美術館

評議員会を2回（平成19年7月20日及び平成20年2月28日）開催し、平成19年度事業の実施状況及び平成20年度年度計画について説明聴取の上、意見交換を行った。

## 3 管理情報の安全性向上

個人情報の保護については、個人情報保護に関する説明会への参加や情報漏えいの事例等の通知を行うとともに、個人情報ファイルの保有状況調査の実施等にあわせ、重要書類は鍵のかかる保管庫に納めること、個人情報を取り扱う業務中に離席する際は、当該書類やパソコン画面を他の職員等から見られないような措置を講じること、廃棄する際はシュレッダーにかけることなど、厳格な書類管理の徹底について注意喚起を行った。

また、独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムへの画像掲載許諾のため、著作権者情報の集積を進めるに当たっては、当該個人情報を記録した電子媒体及び紙媒体を、施設保管庫に納めるなど情報管理徹底のための措置を講じた。

ウイルス対応ソフトウェアの導入の徹底や最新のプログラムへの更新を随時行うなど、電子メール等による外部

からのウィルス進入を回避する安全策を講じた。

情報システムの管理に当たっては、システム担当の新人職員に情報の取り扱いについての研修を実施するとともに、職員に対しては、私物のパソコン等を館内に持ち込ませない、職場のパソコンを自宅に持ち帰らせない、自分のパソコンを他人に使用させない、パスワードを他人に教えない（知られないようにする）、不審なメールやファイル等は開かないなどの注意喚起を行った。

#### 4 人件費の抑制、給与体系の見直し

##### ① 人件費決算

決算額 1,023,416千円（対平成18年度比較 100.7%）

- ・人件費は常勤職員を対象とし、退職金、福利厚生費を含まない。
- ・決算額は、新俸給表への切替及び地域手当新設による増減の影響を含む。

##### ●特記事項

人事院勧告の反映による地域手当の増額の要素が発生したが、人事異動に伴う採用者の若年化など人件費の削減を図り、平成18年度に比してほぼ同額に抑制することができた。

##### ② 給与体系の見直し

国家公務員の給与等を考慮して、平成18年4月から俸給表の水準を全体として平均4.8%引下げるとともに、級の構成の見直し、きめ細かい勤務実績の反映を行うため号俸の4分割を行ったほか、調整手当を廃止し、地域手当を新設するなど、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行った。

また、国立美術館の職員が行う職務は、国の行政職俸給表（一）又は研究職俸給表の適用を受けるものと同等の職務であるとみなし、給与についても一般職給与法に準拠した給与制度で支給していることを前提に、これらとの比較を行った（「独立行政法人の役職員の給与等の水準（平成18年度）」平成19年8月3日総務省公表資料を参照。）。

##### ア 一般職俸給表の適用を受ける職員の給与水準

<国との比較>

項目	国	国立美術館
平均年齢	40.4歳	39.5歳
学歴（大学卒の割合）	47.3%	70.4%
調整手当支給率 ※1	40.2%	100%

※1 1級地、2級地及び4級地の支給地の割合

<他の独立行政法人との比較>18年度年間給与額

項目	全独立行政法人	国立美術館
給与総額	7,326千円	6,199千円
平均年齢	43.4歳	39.5歳
ラスパイレス指数 ※2	107.4	100.7

※2 国の行政職俸給表（一）適用者の給与を100としたときの給与水準の指数

##### イ 研究職俸給表の適用を受ける職員の給与水準

<国との比較>

項目	国	国立美術館
平均年齢	44.2歳	43.4歳
学歴（大学卒の割合）	96.8%	98.1%
調整手当支給率 ※3	40.2%	100%

※3 1級地、2級地及び4級地の支給地の割合

<他の独立行政法人との比較>18年度年間給与額

項目	全独立行政法人	国立美術館
給与総額	9,099千円	8,353千円
平均年齢	44.7歳	43.4歳
ラスパイレス指数 ※4	102.4	97.1

※4 国の研究職俸給表適用者の給与を100としたときの給与水準の指数

##### ウ 常勤役員の年間報酬

項目	全独立行政法人	国立美術館
法人の長	18,859千円	20,000千円
理事	15,957千円	18,997千円

##### ③ 平成19年度の役職員の報酬・給与等について

別紙4「独立行政法人国立美術館の役職員の報酬・給与等について」を参照。

※1 S：特ご優れた実績を上げている。（客観的基準は事前ご設けず、法人の業務の特色に応じて評定を付す。）

※2 F：評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。（客観的基準は事前ご設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評定を付す。）

一般管理費の削減状況 【参考指標】	平成22年度目標値 一般管理費 750,226千円 削減率 15%以上				実績：一般管理費 790,160千円 削減率 10.5%		
業務経費の削減状況 【参考指標】	平成22年度目標値 業務経費 2,118,708千円 削減率 5%以上				実績：業務経費 2,097,355千円 削減率 6.0%		
省エネルギー化 (対前年度削減率) 【定量的に評価】	※1	1.03%以上	0.72%以上 1.03%未満	0.72%未満	※2	実績：対前年度削減率 4.0%	A
廃棄物減量化 【参考指標】	平成22年度目標値 138 t				実績：108 t 削減率 Δ10.2%		
外部評価の開催回数 【定量的に評価】	※1	1回以上	-	0回	※2	実績：14回	A
人件費の削減状況 【参考指標】	平成22年度目標値 人件費 965,652千円 削減率 5%以上				実績：人件費 1,023,416千円 削減率 Δ0.7%		

### Ⅲ 財務・人事・施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置

<p style="text-align: center;">評価 <u>A</u></p> <p>中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。</p>	<p style="text-align: center;">評価のポイント</p> <p>限られた人員、厳しい予算の中で、最大限の努力を行っており、適切に実施されたものと認められる。</p>
---	--

中期計画の各項目	評価項目	評価基準					主な実績及び自己評価	評価	評価委員会によるコメント																																																																								
		S	A	B	C	F																																																																											
Ⅲ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画	財務の状況 【定性的に評価】	Ⅲ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画						A	<p>厳しい予算の中においても、適切な財務計画及び処理がなされている。</p> <p>【より良い事業とするための意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・財務状況に関する監査スタッフの機能強化を求める。</li> <li>・今後、予想される新美術館の収入減少への対応を一考されたい。</li> </ul>																																																																								
<p>収入面に関しては、実績を勘案しつつ、外部資金等を積極的に導入することにより、計画的な収支計画による運営を図る。</p> <p>また、管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努める。</p> <p>1 予算（中期計画の予算） 別紙のとおり</p> <p>2 収支計画 別紙のとおり</p> <p>3 資金計画 別紙のとおり</p>	<p>1 予算（単位：千円）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>区 分</th> <th>計画額</th> <th>実績額</th> <th>増△減額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>収入</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>運営費交付金</td> <td>6,041,513</td> <td>6,041,513</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>展示事業等収入（注1）</td> <td>965,334</td> <td>1,503,746</td> <td>538,412</td> </tr> <tr> <td>寄附金収入</td> <td>0</td> <td>10,748</td> <td>10,748</td> </tr> <tr> <td>施設整備費補助金（注2）</td> <td>7,075,399</td> <td>6,392,929</td> <td>△682,470</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>14,082,246</td> <td>13,948,936</td> <td>△133,310</td> </tr> <tr> <td>支出</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>運営事業費</td> <td>7,006,847</td> <td>7,023,940</td> <td>△17,093</td> </tr> <tr> <td>管理部門経費</td> <td>2,583,887</td> <td>2,400,741</td> <td>183,146</td> </tr> <tr> <td>うち人件費（注3）</td> <td>498,364</td> <td>441,026</td> <td>57,338</td> </tr> <tr> <td>うち一般管理費（注4）（注5）</td> <td>2,085,523</td> <td>1,959,715</td> <td>125,808</td> </tr> <tr> <td>事業部門経費</td> <td>4,422,960</td> <td>4,623,199</td> <td>△200,239</td> </tr> <tr> <td>うち人件費（注3）</td> <td>832,618</td> <td>825,792</td> <td>6,826</td> </tr> <tr> <td>うち展覧事業費（注4）</td> <td>2,665,299</td> <td>2,905,999</td> <td>△240,700</td> </tr> <tr> <td>うち調査研究事業費（注4）</td> <td>216,830</td> <td>233,354</td> <td>△16,524</td> </tr> <tr> <td>うち教育普及事業費（注4）</td> <td>708,213</td> <td>658,054</td> <td>50,159</td> </tr> <tr> <td>施設整備費補助金（注2）</td> <td>7,075,399</td> <td>6,392,929</td> <td>682,470</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>14,082,246</td> <td>13,416,869</td> <td>665,377</td> </tr> <tr> <td>収支差引</td> <td>0</td> <td>532,067</td> <td>532,067</td> </tr> </tbody> </table> <p>主な増減理由            (注1) 入場料収入等の増加による。            (注2) 工事未完により次期へ繰越による。            (注3) 予算計画時に当中期計画期間の退職手当支出相当額を計上したことによる。            (注4) 支出経費の見直しによる。            (注5) 業務の効率化による。</p> <p>●特記事項            運営費交付金を充当して行う業務では、人件費が予算に比べて64,164千円の支出減となった。これは当中期計画期間の退職者予定者の退職手当支出相当額を翌年度以降に繰り越したためである。物件費は、国立新美術館の土地借料の増加等により、予算に比べ81,257千円の支出増となった。            展示事業等収入は、展覧会の入館者数が目標入館者数を上回ったこと、また、国立新美術館の開館による入場料収入が収入の増加に繋がった。その他事業収入では、国立新美術館の公募展事業収入が収入の増加に繋がった。これらの理由により、展示事業等収入は予算に比べて538,412千円の収入増となった。            施設整備費補助金は工事未了となった東京国立近代美術館熱源機器設備更新工事ならびに国立西洋美術館新館空調設備改修工事について、翌事業年度に繰越をしたため682,470千円の収入の減少ならびに支出の</p>	区 分	計画額	実績額	増△減額	収入					運営費交付金	6,041,513	6,041,513	0	展示事業等収入（注1）	965,334	1,503,746	538,412	寄附金収入	0	10,748	10,748	施設整備費補助金（注2）	7,075,399	6,392,929	△682,470	計	14,082,246	13,948,936	△133,310	支出				運営事業費	7,006,847	7,023,940	△17,093	管理部門経費	2,583,887	2,400,741	183,146	うち人件費（注3）	498,364	441,026	57,338	うち一般管理費（注4）（注5）	2,085,523	1,959,715	125,808	事業部門経費	4,422,960	4,623,199	△200,239	うち人件費（注3）	832,618	825,792	6,826	うち展覧事業費（注4）	2,665,299	2,905,999	△240,700	うち調査研究事業費（注4）	216,830	233,354	△16,524	うち教育普及事業費（注4）	708,213	658,054	50,159	施設整備費補助金（注2）	7,075,399	6,392,929	682,470	計	14,082,246	13,416,869	665,377	収支差引	0	532,067
区 分	計画額	実績額	増△減額																																																																														
収入																																																																																	
運営費交付金	6,041,513	6,041,513	0																																																																														
展示事業等収入（注1）	965,334	1,503,746	538,412																																																																														
寄附金収入	0	10,748	10,748																																																																														
施設整備費補助金（注2）	7,075,399	6,392,929	△682,470																																																																														
計	14,082,246	13,948,936	△133,310																																																																														
支出																																																																																	
運営事業費	7,006,847	7,023,940	△17,093																																																																														
管理部門経費	2,583,887	2,400,741	183,146																																																																														
うち人件費（注3）	498,364	441,026	57,338																																																																														
うち一般管理費（注4）（注5）	2,085,523	1,959,715	125,808																																																																														
事業部門経費	4,422,960	4,623,199	△200,239																																																																														
うち人件費（注3）	832,618	825,792	6,826																																																																														
うち展覧事業費（注4）	2,665,299	2,905,999	△240,700																																																																														
うち調査研究事業費（注4）	216,830	233,354	△16,524																																																																														
うち教育普及事業費（注4）	708,213	658,054	50,159																																																																														
施設整備費補助金（注2）	7,075,399	6,392,929	682,470																																																																														
計	14,082,246	13,416,869	665,377																																																																														
収支差引	0	532,067	532,067																																																																														

減少となった。

寄附金については、10件、15,211千円を獲得した。そのうち14,969千円を当年度の収益とし、残りの242千円を次年度以降に繰り越して執行する予定である。

## 2 収支計画（単位：千円）

区 分	計画額	実績額	増△減額
費用の部			
経常経費	5,767,789	6,093,424	△325,635
管理部門経費	2,393,825	2,365,844	27,981
うち人件費	498,364	441,025	57,339
うち一般管理費（注1）	1,895,461	1,924,819	△29,358
事業部門経費	3,262,418	3,571,093	△308,675
うち人件費	832,618	825,791	6,827
うち展覧事業費（注1）	1,532,563	1,894,944	△362,381
うち調査研究事業費（注2）	211,652	201,542	10,110
うち教育普及事業費（注2）	685,585	648,816	36,769
減価償却費	111,546	156,487	△44,941
収益の部			
運営費交付金（注2）	6,041,513	4,802,277	△1,239,236
展示事業等の収入（注3）	965,334	1,530,753	565,419
資産見返運営費交付金戻入	35,295	140,145	104,850
資産見返寄附金戻入	-	824	824
資産見返物品受贈額戻入	76,466	13,536	△62,930
経常利益		6,487,535	
臨時損失		3,876	
臨時利益		7,590	
当期純利益		397,825	
当期総利益		397,825	

主な増減理由

（注1）固定資産の取得が見込より少なく、費用への計上が多かったことによる。

（注2）固定資産の取得が見込より多く、費用への計上が少なかったことによる。

（注3）入場料収入等の増加による。

## 3 資金計画（単位：千円）

区 分	計画額	実績額	増△減額
資金支出	14,082,246	13,573,786	508,460
業務活動による支出（注1）	5,654,107	7,219,072	△1,564,965
投資活動による支出（注1）（注3）	8,428,139	6,354,714	2,073,425
資金収入	14,082,246	13,929,176	△153,070
業務活動による収入	7,006,847	7,629,176	622,329
運営費交付金による収入	6,041,513	6,041,513	-
展示事業等による収入（注2）	965,334	1,587,663	622,329
投資活動による収入	7,075,399	6,300,000	△775,399
施設整備補助金による収入（注3）	7,075,399	6,300,000	△775,399
資金増加額		355,390	
資金期首残高		1,409,291	
資金期末残高		1,764,681	

主な増減理由

（注1）活動内容の見直しによる。

（注2）入場料収入等の増加による。

（注3）工事の未完による。

		<p><b>4 貸借対照表（単位：千円）</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">資産の部</th> <th colspan="2">負債及び純資産の部</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>資産の部</td> <td></td> <td>負債の部</td> <td></td> </tr> <tr> <td>I 流動資産</td> <td>1,910,419</td> <td>I 流動負債</td> <td>1,351,051</td> </tr> <tr> <td>II 固定資産</td> <td></td> <td>II 固定負債</td> <td>1,192,210</td> </tr> <tr> <td>1. 有形固定資産</td> <td>126,999,589</td> <td>負債合計</td> <td>2,543,261</td> </tr> <tr> <td>2. 無形固定資産</td> <td>36,659</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>固定資産合計</td> <td>127,036,248</td> <td>純資産の部</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>I 資本金</td> <td>81,019,148</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>II 資本剰余金</td> <td>44,327,001</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>III 利益剰余金</td> <td>1,057,256</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>純資産合計</td> <td>126,403,406</td> </tr> <tr> <td>資産の部合計</td> <td>128,946,667</td> <td>負債及び純資産の部合計</td> <td>128,946,667</td> </tr> </tbody> </table>	資産の部		負債及び純資産の部		資産の部		負債の部		I 流動資産	1,910,419	I 流動負債	1,351,051	II 固定資産		II 固定負債	1,192,210	1. 有形固定資産	126,999,589	負債合計	2,543,261	2. 無形固定資産	36,659			固定資産合計	127,036,248	純資産の部				I 資本金	81,019,148			II 資本剰余金	44,327,001			III 利益剰余金	1,057,256			純資産合計	126,403,406	資産の部合計	128,946,667	負債及び純資産の部合計	128,946,667		
資産の部		負債及び純資産の部																																																		
資産の部		負債の部																																																		
I 流動資産	1,910,419	I 流動負債	1,351,051																																																	
II 固定資産		II 固定負債	1,192,210																																																	
1. 有形固定資産	126,999,589	負債合計	2,543,261																																																	
2. 無形固定資産	36,659																																																			
固定資産合計	127,036,248	純資産の部																																																		
		I 資本金	81,019,148																																																	
		II 資本剰余金	44,327,001																																																	
		III 利益剰余金	1,057,256																																																	
		純資産合計	126,403,406																																																	
資産の部合計	128,946,667	負債及び純資産の部合計	128,946,667																																																	
<p>IV 短期借入金に限年度額 短期借入金の限度額は、12億円。 短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合である。</p>		<p><b>5 短期借入金</b> 実績なし</p>	A																																																	
<p>V 重要な財産の処分等に関する計画 重要な財産を譲渡、処分する計画はない。</p>		<p><b>6 重要な財産の処分等</b> 実績なし</p>	A																																																	
<p>VI 剰余金の使途 決算において剰余金が発生した時は、次の購入等に充てる。 1 美術作品の購入・修理 2 調査研究、出版事業の充実 3 企画展等の加増施設 4 入館者サービス、情報提供の質的向上、老朽化対応のための整備の充実</p>		<p><b>7 剰余金</b> (1) 当期末処分利益の処分計画</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th>金額（円）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>当期末処分利益</td> <td>397,825,051</td> </tr> <tr> <td>当期総利益</td> <td>397,825,051</td> </tr> <tr> <td>処分計画</td> <td></td> </tr> <tr> <td>積立金（通則法第44条第1項）</td> <td>4,059,661</td> </tr> <tr> <td>独立行政法人通則法第44条第3項により 主務大臣の承認を受けようとする額</td> <td></td> </tr> <tr> <td>美術作品購入・修理積立金</td> <td>393,765,390</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) 利益の生じた主な理由 予算額を上回った自己収入があったことによる。</p> <p>(3) 目的積立金の使用状況 実績なし</p> <p>(4) 積立金（通則法第44条第1項）の状況（単位：円）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>使途の内訳</th> <th>期首残高</th> <th>当期増加額</th> <th>当期減少額</th> <th>期末残高</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>積立金</td> <td>0</td> <td>277,898,619</td> <td>0</td> <td>277,898,619</td> </tr> <tr> <td>前中期目標期間繰越積立金</td> <td>381,532,745</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>381,532,745</td> </tr> </tbody> </table> <p>通則法第44条第3項の目的積立金の申請を行わなかった理由として、「独立行政法人の経営努力認定について（平成18年7月21日（平成19年7月4日改訂）総務省行政管理局）」の（3）「独立行政法人の経営努力認定の基準」、②「経営努力認定の対象案件の利益の実績が原則として前年度実績額を上回ること。」の基準を満たさなかったため。</p>	区分	金額（円）	当期末処分利益	397,825,051	当期総利益	397,825,051	処分計画		積立金（通則法第44条第1項）	4,059,661	独立行政法人通則法第44条第3項により 主務大臣の承認を受けようとする額		美術作品購入・修理積立金	393,765,390	使途の内訳	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	積立金	0	277,898,619	0	277,898,619	前中期目標期間繰越積立金	381,532,745	0	0	381,532,745	A	<p>剰余金の使途として、美術作品の購入・修理へ充てることは、本来の目的に合致しており適正であると認められる。</p> <p>【より良い事業とするための意見】 各館の現場に活動する職員のインセンティブ向上をふくめ、剰余金の法人内の配分について、さらなる検討が望まれる。</p>																			
区分	金額（円）																																																			
当期末処分利益	397,825,051																																																			
当期総利益	397,825,051																																																			
処分計画																																																				
積立金（通則法第44条第1項）	4,059,661																																																			
独立行政法人通則法第44条第3項により 主務大臣の承認を受けようとする額																																																				
美術作品購入・修理積立金	393,765,390																																																			
使途の内訳	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高																																																
積立金	0	277,898,619	0	277,898,619																																																
前中期目標期間繰越積立金	381,532,745	0	0	381,532,745																																																
<p>VII その他主務省令で定める業務運営に関する事項 1 人事に関する計画</p>	<p>人事の状況 【定性的に評価】</p>	<p><b>8 人事に関する計画</b> 職種別人員の増減状況（過去5年分）</p>	A	<p>少ない人員の中で、最大限の努力を行ったことが認められる。</p>																																																

(1) 方針  
 ① 国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員的能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を核とし、導入する。  
 ② 人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供に努める。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。

(2) 人員に係る指標  
 常勤職員については、その職員数の抑制を図る。  
 (参考 1)  
 1) 期初の常勤職員数 131人  
 2) 期末の常勤職員数の見込み 131人  
 (参考 2) 中期目標期間中の人件費総額見込額 5,220百万円  
 但し、上記の額は、役員員に対し支給する報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額であり、退職金、福利厚生費を含まない。

施設整備の状況  
 【定年外に計画】

(単位：人)					
職種※	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
定年制研究系職員	58	60	60	61	61
定年制事務系職員	64	68	70	70	70

① 「公務員の給与と定年に関する取扱について(平成18年10月17日閣議決定)」に基づき、公務員の例に準じて措置、対処している。

② 人事交流の推進  
 事務系職員については、文化庁、国立大学法人及び他の独立行政法人との間で定期的な人事交流を行い、組織の効率化と個々の職員の能力の発揮とその向上を考慮して人事配置を行った。

③ 職員の研修等  
 ア 東京国立近代美術館  
 ・ 人事院主催「第86回関東地区中堅係員研修」(1名)  
 ・ 人事院主催「第38回関東地区係長研修」(1名)  
 ・ 人事院主催「人事院勧告に関する説明会」(1名)  
 ・ 会計検査院主催「第26回各政府関係機関等内部監査業務講習会」(1名)  
 ・ 経済産業省主催「平成19年度後期CIO/CTO研修」(1名)  
 ・ 独立行政法人国立文化財機構主催「個人情報保護講演会」(1名)  
 ・ 財団法人文化財虫害研究所主催「第29回文化財(書籍・古文書等を含む)の虫害害保存対策研修会」(1名)  
 ・ 財団法人文化財虫害研究所主催「第27回文化財防虫防菌処理実務講習会」(1名)  
 ・ 平成19年度国立美術館新任職員オリエンテーション(10名)  
 ・ 文部科学省在外研究員として海外へ派遣(1名)  
 ・ 放送大学受講(1名)

イ 京都国立近代美術館  
 ・ 人事院主催「近畿地区中堅係員研修」(1名)  
 ・ 人事院主催「近畿地区課長研修」(1名)  
 ・ 人事院主催「人事院勧告に関する説明会」(1名)  
 ・ 人事院主催「改正給与法説明会」(1名)  
 ・ 京都地方法務局主催「京都地方法務局管内行政庁訟務事務担当者会議」(1名)  
 ・ 平成19年度国立美術館新任職員オリエンテーション(3名)

ウ 国立西洋美術館  
 ・ 人事院主催「平成19年度関東地区新採用職員研修」(1名)  
 ・ 人事院主催「第87回関東地区JST基本コース(仕事と人とマネジメント研修指導者養成課程)」(1名)  
 ・ 文部科学省主催「科学研究費補助金公募要領等説明会」(1名)  
 ・ 文部科学省主催「科学研究費補助金についての説明会」(1名)  
 ・ 文部科学省主催「科学研究費補助金に係る不正使用等防止に関する説明会」(1名)  
 ・ 文化庁主催「平成19年度著作権セミナー」(1名)  
 ・ 東京大学主催「平成19年度東京大学係長級研修(初級)」(1名)  
 ・ ルーヴル美術館主催「ルーヴル美術館サマースクール in JAPAN」(1名)  
 ・ 財団法人省エネルギーセンター主催「平成19年度エネルギー管理員新規講習」(1名)  
 ・ 平成19年度国立美術館新任職員オリエンテーション(5名)  
 ・ 年末調整事務関連説明会(1名)

エ 国立国際美術館  
 ・ 人事院主催「平成19年度近畿地区メンター養成研修」(1名)  
 ・ 平成19年度国立美術館新任職員オリエンテーション(1名)  
 ・ 消火、避難訓練(業者含む。平成20年1月21日)

オ 国立新美術館  
 ・ 文部科学省主催「大学等における省エネルギー対策に関する研修会」(1名)  
 ・ 文化庁主催「平成19年度著作権セミナー」(1名)  
 ・ 財務省会計センター主催「第45回政府関係法人会計事務職員研修」(1名)  
 ・ 総務省関東管区行政評価局主催「平成19年度関東地区行政管理・評価セミナー」(1名)  
 ・ 環境省総合環境政策局主催「環境配慮契約法基本方針全国説明会」(2名)  
 ・ 独立行政法人国立公文書館主催「平成19年度公文書館等職員研修会」(1名)  
 ・ 独立行政法人国立文化財機構主催「個人情報保護講演会」(1名)  
 ・ 国立情報学研究所主催「目録システム講習会」(1名)  
 ・ 平成19年度国立美術館新任職員オリエンテーション(12名)  
 ・ 消防訓練(部分訓練。平成20年2月12日)

2 別紙のとおり施設整備に関する計画に沿った整備を推進する。

施設整備の状況  
 【定年外に計画】

9 施設整備に関する計画  
 東京国立近代美術館本館熱源機器設備更新工事、京都国立近代美術館美術品収蔵ラック増設工事、国立西洋美術

A  
 少ない予算の中で適切に実施され、総体的に良好な水準にあると認められる。

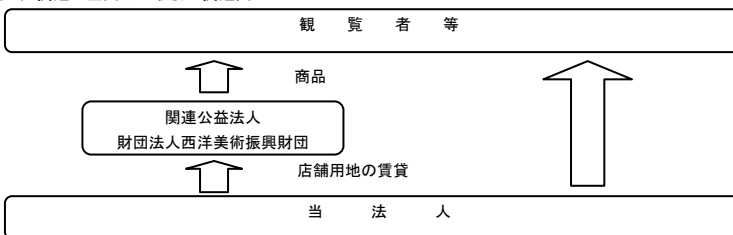
館新館空調設備改修その他工事及び国立新美術館土地購入について、平成20年度予算に施設整備費補助金が計上された。

10 関連公益法人

(1) 関連公益法人の概要

名称	業務の概要	独立行政法人との関係
財団法人西洋美術振興財団	西洋美術に関する展覧会・講演会等の開催及びその支援	西洋美術館内において、当法人から店舗用地を賃借している

(2) 関連公益法人の取引の関連図



(3) 関連公益法人の財務状況 (単位: 千円)

一般正味財産増減の部									
収益	収益の内訳		費用	費用の内訳			当期増減額	一般正味財産期首残高	一般正味財産期末残高
	受取補助金等	その他の収益		事業費	管理費	その他の費用			
A			B				C=A-B	D	E=C+D
35,575	0	35,575	45,680	29,171	15,852	657	△ 10,105	170,367	160,262

指定正味財産増減の部							正味財産期末残高
収益	収益の内訳		費用等	当期増減額	指定正味財産期首残高	指定正味財産期末残高	
	受取補助金等	その他の収益					G
0	0	0	0	0	0	0	160,262

(4) 独立行政法人国立美術館が拠出等をしている関連公益法人の基本財産等の状況

えん、拠出、寄付等の金額	会費、負担金等の金額
-	-

(5) 関連公益法人との取引の状況 (単位: 千円)

関連公益法人に対する債権債務の金額	関連公益法人に対し行っている債務保証の金額	関連公益法人の事業収入の金額	(うち、独立行政法人国立美術館の発注等に係わる金額及びその割合)
-	-	35,575	-

A

適切であると認められる。

【より良い事業とするための意見】  
 今後は、新公益法人制度の下で、より効果的な協力・支援体制のあり方について、追求されることが望まれる。



## 内部統制（監査規定、体制、監査実績、監査内容等）についての評価委員会のコメント

監事監査及び内部監査ともに、規程を定め確実に実施されている。

外部、民間からの人的資源を活用するなど、内部統制に関する活発な議論を実現する体制を構築することで、内部統制機能のさらなる充実を図ることができると考えられる。